

北海道立埋蔵文化財センター

北海道立埋蔵文化財センター

年報11

年報
11

平成21(2009)年度

平成21
(2009)
年度

北海道立埋蔵文化財センター

年報11

平成21(2009)年度



6月12日(金) 岩見沢市立幌向小学校勾玉づくり体験学習



7月7日(火) 大阪府立弥生文化博物館施設見学



7月29日(水) カトリック小野幌教会サマースクール
勾玉づくり体験学習



7月30日(木) トライ☆アス☆カル2009
「サマーアートキャンプIN江別」施設利用



7月4日(土) 考古学教室出前講座1(釧路町)



2月27日(土) 考古学教室出前講座7(喜茂別町)



1月14日(木) 子どもの文化財愛護活動推進事業
「わんぱくラリー」(洞爺湖町)



2月18日(木) 子どもの文化財愛護活動推進事業
「キッズスクール」(下川町)

目 次

1	設置の目的	1
2	沿 革	1
3	施設の概要	1
4	調査研究事業の概要	3
	(1) 重要遺跡確認調査	3
	(2) 大会・研究会・研修会参加	5
	(3) 事業共催・事業協力・講師派遣・市町村協力	5
5	収蔵・保管事業の概要	7
	(1) 収蔵資料目録	7
6	普及・啓発事業の概要	9
	(1) 展示活動	9
	(2) 講演会・報告会	17
	(3) 考古学教室	18
	(4) こども考古学教室	20
	a 「夏休み親子考古学教室」	
	b 写生会「ビビちゃんと描く縄文の世界」	
	c 「冬休み縄文生活体験ひろば」	
	d 「冬休み親子考古学教室」	
	e 「冬休み親子写真撮影会」	
	(5) 考古学教室出前講座	21
	(6) 研修会	23
	(7) 特別利用等の状況	24
	a 特別利用一覧	
	b 模写品等使用承認一覧	
	c 資料貸出承認一覧	
7	利用状況など	26
	(1) 入館者一覧	26
	(2) 団体利用者対応	28
	(3) 博物館実習・現場実習等	29
	(4) 購入図書一覧	30
	(5) 刊行物受領先一覧	32
8	講演会要旨	33
	(1) 秋季講演会 『動物の考古学—イノシシ・ブタ・イヌ』（西本豊弘氏）	33
	(2) 冬季講演会 『正倉院宝物の曝涼』（成瀬正和氏）	38

1 設置の目的

北海道には貴重な埋蔵文化財が数多く発見されており、これらの埋蔵文化財の保護、保存・活用を図るため、調査研究を行なうとともに、出土文化財等の収蔵保管、公開展示並びに文化財保護思想の普及啓発を図る総合的な機能を有する道立の埋蔵文化財センターを設置する。

2 沿革

- 平成7年3月 北海道立埋蔵文化財センター（仮称）基本構想策定
- 平成8年9月 本館基本設計完了
- 平成9年3月 本館実施設計完了
 - 10月 本館建設工事着工
 - 12月 別館（整理作業所）基本設計完了
- 平成10年3月 別館（整理作業所）実施設計完了
 - 9月 別館（整理作業所）建設工事着工
- 平成11年3月 本館建設工事竣工
 - 4月 北海道立埋蔵文化財センター開設
 - 8月 別館（整理作業所）建設工事竣工
 - 11月 一般公開

3 施設の概要

(1) 工期

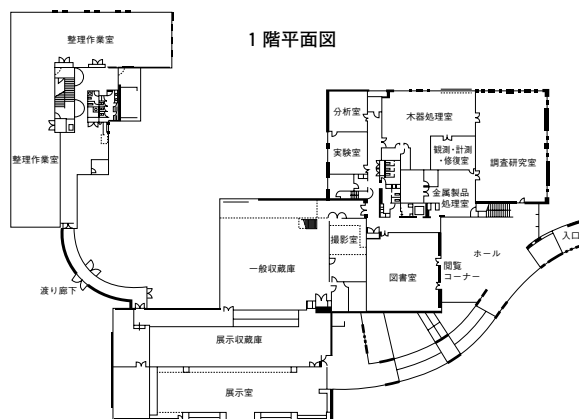
- [本館工事] 平成9年10月31日着工 平成11年3月18日竣工
- [別館工事] 平成10年9月10日着工 平成11年8月18日竣工
- [外構工事] 平成11年7月28日着工 平成11年12月10日竣工

(2) 面積

- [敷地面積] 18,599.50㎡
- [延床面積] 本館：5,063.02㎡（鉄筋コンクリート造・2階建）
別館：2,081.80㎡（鉄骨造・3階建；整理作業所）（渡り廊下含む）

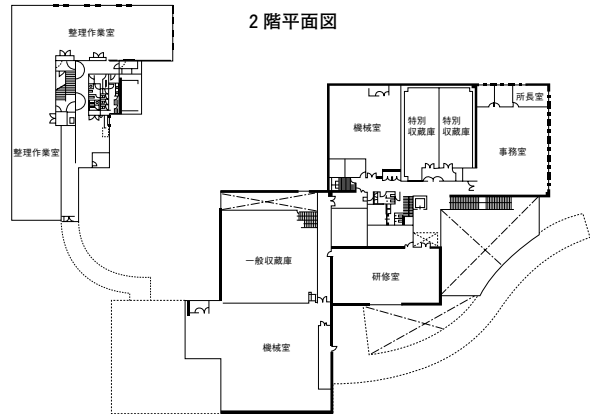
[部屋別面積]

- 本館1階：調査研究室（253㎡）
- 保存科学室（167㎡）
- 観測・計測・修復室（47㎡）
- 金属製品処理室（31㎡）
- 分析室（48㎡）
- 実験室（53㎡）
- 撮影室・暗室（105㎡）
- 図書室（177㎡）
- 一般収蔵庫（399㎡）
- 展示収蔵庫（321㎡）
- 展示室（310㎡）

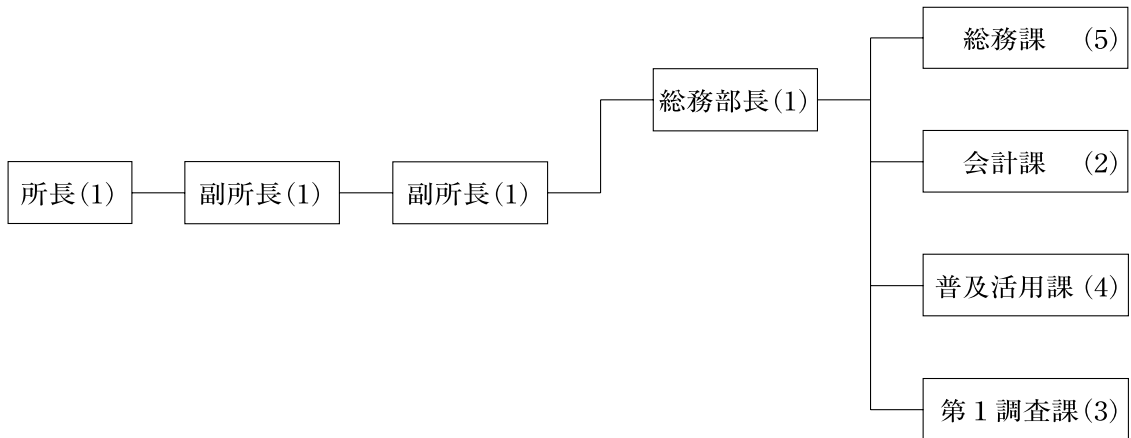


- 2階：所長室 (47㎡)
- 事務室 (241㎡)
- 特別収蔵庫 (227㎡)
- 研修室 (196㎡)
- 一般収蔵庫 (319㎡)

- 別館 1階：整理作業室 (520㎡)
- 2階：整理作業室 (540㎡)
- 3階：整理作業室 (220㎡)



(3) 組織図



(4) 職員名簿

職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
所長	坂本 均	総務部長	中田 仁	普及活用課長	鎌田 望
副所長	松本昭一	総務課長	松本 繁	普及活用課主査	藤本昌子
副所長	畑 宏明	総務課主査	葛西宏昭	普及活用課主査	倉橋直孝
		総務課主任	今本宏信	普及活用課主査	藤井 浩
		総務課参与	北浦 満	第1調査課長	田口 尚
		総務課参与	石田八郎	第1調査課主査	花岡正光
		会計課長	吉田貴和子	第1調査課主任	吉田裕吏洋
		会計課主任	中村貴志		



4 調査研究事業の概要

(1) 重要遺跡確認調査

〔調査遺跡〕 幌延町音類竪穴群（北海道教育委員会登録番号 G-09-1）

〔所在地〕 天塩郡幌延町字浜里188ほか 国有林174～175林班

天塩郡豊富町稚咲内 国有林173林班

〔調査期間〕 平成21年9月28日～10月16日

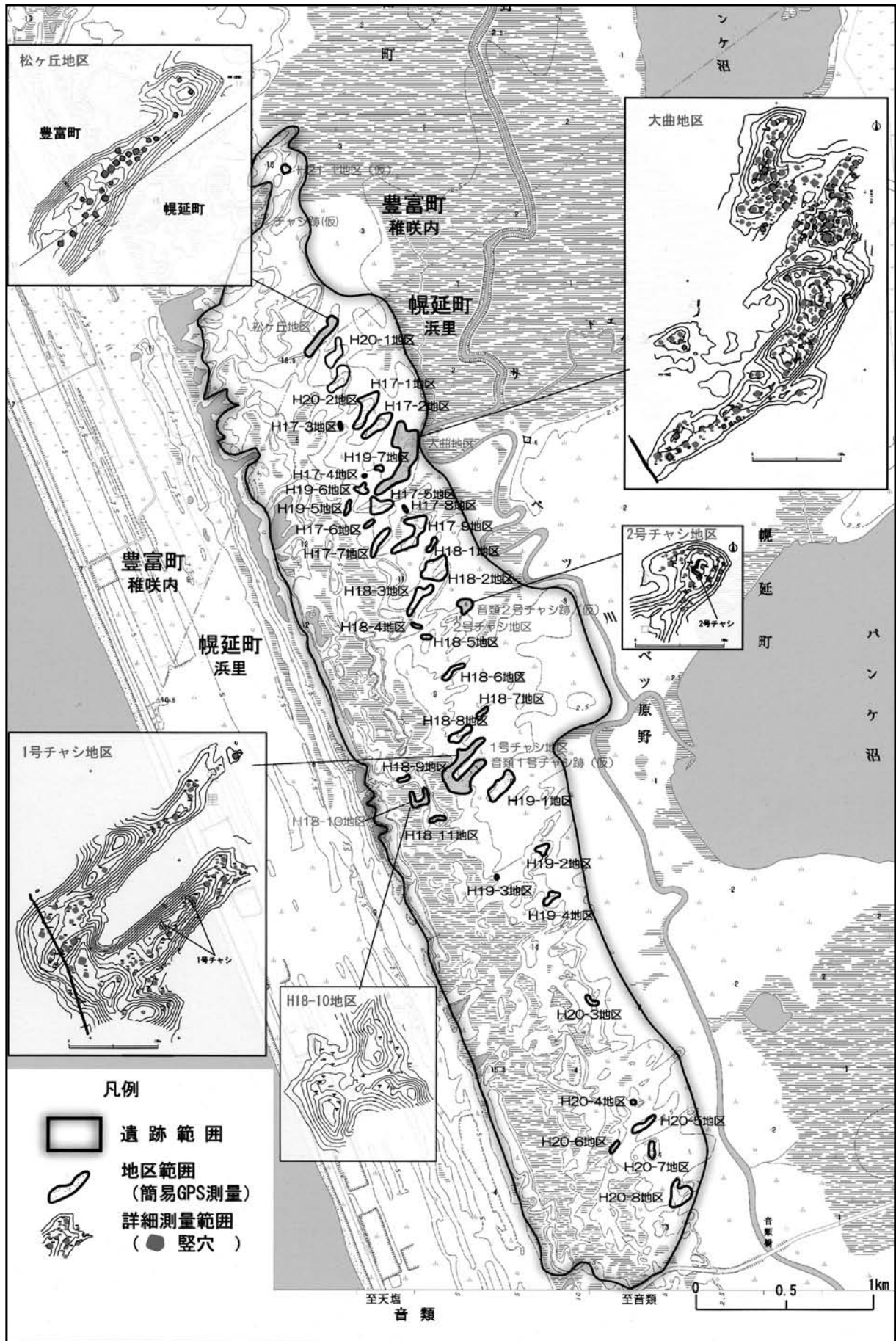
〔調査内容〕 北海道教育委員会では、北海道史をたどる上で重要と考えられる50遺跡を選定し、調査対象順に5遺跡ずつ10グループに区分している。北海道立埋蔵文化財センターでは、これらの遺跡を対象に重要遺跡確認調査を実施することとなった。確認調査は、平成12年度に小樽市・余市町所在の西崎山ストーンサークル、平成13・14年度に奥尻町青苗砂丘遺跡、平成15・16年度に恵山町（現函館市）恵山貝塚で実施した。幌延町音類竪穴群については、平成11年度以降に地元調整と予備的調査を行い、土地所有者および幌延町・同町教育委員会の協力を得られる見込みとなったことから、平成17年度から調査を開始した。全体を5か年で行う計画を立て、今年度で調査を終了した。

平成21年度は豊富町側の踏査を行い、稚咲内で竪穴住居跡5軒とチャシ跡を1か所検出した。これにより音類竪穴群の北限を確認することができた。これにより、平成17年度から平成21年度の5か年の調査で、確認し位置を記録した竪穴は総数796軒である。竪穴のまとめりとして確認できた範囲は40か所である。

竪穴は、サロベツ川に面する砂丘上の北東-南西方向へのびる尾根上に多く立地している。一部は尾根から湿地へ向かう低位部にも見られる。分布は「大曲地区」周辺が最も多い。この地域はサロベツ川が砂丘に最も接近する場所である。サロベツ川が砂丘から遠ざかる地区では少なくなり、再び砂丘に近づく地区では「1号チャシ地区」「H19-1地区」など、竪穴が増加する傾向がうかがえる。また、「H18-9・10・11地区」のように、従来竪穴が存在しないと考えられてきた砂丘列の日本海側で竪穴が確認されている。また、平成17・18・21年度の調査時にそれぞれチャシ跡を発見した。サロベツ川筋では初めての発見である。詳細は、別に刊行した報告書に掲載している。



豊富町側踏査状況



確認した竖穴群の位置

(2) 大会・研究会・研修会参加

平成21年5月21日（木）・22日（金）福岡県北九州市

平成21年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会役員会・総会、関連施設視察
参加者：所長 坂本 均

平成21年5月21日（木）・22日（金）福岡県北九州市

平成21年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会総会、関連施設視察
参加者：総務部総務課参与 石田八朗

平成21年6月13日（土）・14日（日）岡山県倉敷市

文化財保存修復学会第31回大会および2009年度総会
参加者：第1調査部第1調査課課長 田口 尚

平成21年7月3日（金）・4日（土）奈良県奈良市

第21回埋蔵文化財写真技術研究会
参加者：第1調査部第1調査課主任 吉田裕吏洋

平成21年7月11日（土）・12日（日）愛知県名古屋市

日本文化財科学会第26回大会
参加者：第1調査部第1調査課課長 田口 尚

(3) 事業共催・事業協力・講師派遣・市町村協力

平成21年5月30・31日（土・日）

事業名：「オホーツクフェアin札幌2009 Natural Factory OKHOTSK」

『楽しく学ぶモノづくりの考古学』

実施場所：サッポロファクトリー二条館地下

主催：網走支庁・オホーツク圏観光連盟、共催：北海道開拓記念館・(財)北海道開拓の村・北海道立埋蔵文化財センター・湧別川流域史研究会、協力：サッポロファクトリー・(株)サッポロライオン・NEXCO東日本・JR北海道・(財)オホーツク地域振興機構

講師：第1調査部普及活用課課長 鎌田 望、主査 倉橋直孝・藤井 浩

参加者：131名（30日：勾玉づくり25名、土偶づくり3名、石器づくり1名、計29名。

31日：勾玉づくり57名、土偶づくり20名、石器作り25名、計102名）

*勾玉づくりは北海道立埋蔵文化財センター、土偶づくりは北海道開拓記念館、石器づくりは湧別川流域史研究会が担当した。



オホーツクフェアin札幌2009 Natural Factory OKHOTSK『楽しく学ぶモノづくりの考古学』

平成21年10月23日（金）

事業名：石狩管内教育研究会 社会（小）部会 二次集会全体研修

実施場所：千歳市立緑小学校体育館

主催：石狩管内教育研究会

講師：第1調査部普及活用課主査 倉橋直孝・藤井 浩

参加者：82名（大人）

平成21年11月13日（土）

事業名：北海道博物館紀行「北海道立埋蔵文化財センター：土偶のおはなしと土偶づくり」

実施場所・主催：北海道立北方民族博物館

講師：第1調査部普及活用課課長 鎌田 望

参加者：10名（大人）

平成21年11月13日（土）

事業名：北広島市エコミュージアム推進事業

まちを好きになる市民大学「エコミュージアム資料論 考古学資料論」

実施場所：北広島市芸術文化ホール

主催：北広島市教育委員会北広島エコミュージアム事務局

講師：第1調査部普及活用課主査 藤井 浩

参加者：36名（大人）

平成22年1月14日（木）

事業名：子どもの文化財愛護活動推進事業「わんぱくラー」

実施場所：洞爺湖町役場防災研修ホール

主催：洞爺湖町教育委員会

共催：北海道文化財保護協会

講師：第1調査部普及活用課主査 倉橋直孝

参加者：53名（大人9名、子ども44名）

平成22年2月18日（木）

事業名：子どもの文化財愛護活動推進事業：「キッズスクール」

実施場所：下川町町民会館

主催：下川町教育委員会

共催：北海道文化財保護協会

講師：第1調査部普及活用課主査 倉橋直孝

参加者：24名（大人4名、子ども20名）

平成22年2月19日（金）

事業名：子どもの文化財愛護活動推進事業：「お話し会+勾玉づくり」

実施場所：下川町恵林館

主催：アイスキャンドルスクエア実行委員会、共催：北海道文化財保護協会

講師：第2調査部第2調査課主査 笠原 興、第1調査部普及活用課主査 倉橋直孝

参加者：お話し会 50名（大人42名、子ども8名）、

勾玉づくり40名（大人32名、子ども8名）、

計90名（大人74名、子ども16名）

5 収蔵・保管事業の概要

(1) 収蔵資料目録

出土文化財を北海道出土文化財取扱要綱（平成13年4月11日付け教育庁・出納局長通知）等に則して保管し、いつでも活用できるよう管理を行い、整理作業を進めている。

収蔵資料目録の中で、網掛け部分が今年度新たに収蔵したものである。また、報告書ごとの復元個体数も掲載した。

	シリーズ名称	発行年度	報告書名	所在地	遺跡名	掲載遺物 コンテナ数	その他コ ンテナ数	復元土器 個体数	備考
1	道教委 1	昭和52	1977	美沢川流域の遺跡群 I	千歳市	美々4	5	140	1
2	道教委 1	昭和52	1977	美沢川流域の遺跡群 I	千歳市	美々5	1	1	0
3	道教委 3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群 III	千歳市	美々4	3	152	15
4	道教委 3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群 III	千歳市	美々5	11	74	0
5	道教委 3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群 III	千歳市	美々6	2	13	0
6	道教委 3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群 III	千歳市	美々7	7	42	0
7	北埋調報 3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群 IV	千歳市	美々4	6	365	108
8	北埋調報 3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群 IV	千歳市	美々5	3	50	5
9	北埋調報 3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群 IV	千歳市	美々6	2	16	3
10	北埋調報 3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群 IV	千歳市	美々7	1	4	3
11	北埋調報 7	昭和56	1981	美沢川流域の遺跡群 V	千歳市	美々8	1	91	117
12	北埋調報 8	昭和57	1982	美沢川流域の遺跡群 VI	千歳市	美々8	1	5	9
13	北埋調報 9	昭和57	1982	ママチ遺跡	千歳市	ママチ	9	161	73
14	北埋調報 14	昭和58	1983	美沢川流域の遺跡群 VII	千歳市	美々4	9	166	143
15	北埋調報 14	昭和58	1983	美沢川流域の遺跡群 VII	千歳市	美々9	1	2	4
16	北埋調報 17	昭和59	1984	美沢川流域の遺跡群 VIII	千歳市	美々4	3	33	32
17	北埋調報 17	昭和59	1984	美沢川流域の遺跡群 VIII	千歳市	美々5	1	5	0
18	北埋調報 24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群 IX	千歳市	美々2	9	53	4
19	北埋調報 24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群 IX	千歳市	美々4	5	57	0
20	北埋調報 24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群 IX	千歳市	美々8	1	7	5
21	北埋調報 35	昭和61	1986	美沢川流域の遺跡群 X	千歳市	美々3	2	13	4
22	北埋調報 36	昭和61	1986	ママチ遺跡 III	千歳市	ママチ	8	84	75
23	北埋調報 44	昭和62	1987	美沢川流域の遺跡群 XI	千歳市	美々8	2	42	27
24	北埋調報 62	平成1	1989	美沢川流域の遺跡群 X III	千歳市	美々3	2	39	7
25	北埋調報 62	平成1	1989	美沢川流域の遺跡群 X III	千歳市	美々8	1	42	72
26	北埋調報 69	平成2	1990	美沢川流域の遺跡群 X IV	千歳市	美々3	14	134	34
27	北埋調報 69	平成2	1990	美沢川流域の遺跡群 X IV	千歳市	美々8低湿部	0	0	0
28	北埋調報 77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群 X V	千歳市	美々3	4	10	31
29	北埋調報 77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群 X V	千歳市	美々7	3	14	12
30	北埋調報 77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群 X V	千歳市	美々8	3	37	16
31	北埋調報 77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群 X V	千歳市	美々8低湿部	1	0	2
32	北埋調報 83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群 X VI	千歳市	美々7	3	11	7
33	北埋調報 83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群 X VI	千歳市	美々8	2	59	72
34	北埋調報 83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群 X VI	千歳市	美々8低湿部	1	0	1
35	北埋調報 86	平成5	1993	ユカンボシC2遺跡	千歳市	ユカンボシC2	4	24	14
36	北埋調報 89	平成5	1993	美沢川流域の遺跡群 X VII	千歳市	美々8	1	0	84
37	北埋調報 90	平成5	1993	オサットー1・キウス7遺跡	千歳市	オサットー1	1	0	0
38	北埋調報 90	平成5	1993	オサットー1・キウス7遺跡	千歳市	キウス7	4	14	13
39	北埋調報 92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	キウス5	9	33	12
40	北埋調報 92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	キウス7	1	5	7
41	北埋調報 92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	ケネフチ8	1	5	0
42	北埋調報 96	平成6	1994	オサツ2・14遺跡	千歳市	オサツ2	4	20	117
43	北埋調報 96	平成6	1994	オサツ2・14遺跡	千歳市	オサツ14	7	31	16
44	北埋調報 100	平成7	1995	ユカンボシC9遺跡	千歳市	ユカンボシC9	3	25	33
45	北埋調報 102	平成7	1995	美沢川流域の遺跡群 X VIII	千歳市	美々8	0	0	14
46	北埋調報 102	平成7	1995	美沢川流域の遺跡群 X VIII	千歳市	美々8低湿部	2	168	10
47	北埋調報 103	平成7	1995	オサツ2遺跡(2)	千歳市	オサツ2	5	0	30
48	北埋調報 104	平成7	1995	キウス5遺跡(2)	千歳市	キウス5	9	89	18
49	北埋調報 105	平成7	1995	キウス7遺跡(3)	千歳市	キウス7	15	97	110
50	北埋調報 113	平成8	1996	美沢川流域の遺跡群 X IX	千歳市	美々4	12	343	229
51	北埋調報 114	平成8	1996	美沢川流域の遺跡群 X X	千歳市	美々8低湿部	1	0	0
52	北埋調報 115	平成8	1996	キウス5遺跡(3)	千歳市	キウス5	17	113	254
53	北埋調報 116	平成8	1996	キウス5遺跡(4)B・C地区	千歳市	キウス5	9	24	17
54	北埋調報 117	平成8	1996	キウス7遺跡(4)	千歳市	キウス7	8	29	0
55	北埋調報 119	平成8	1996	キウス4遺跡	千歳市	キウス4	4	37	1
56	北埋調報 124	平成9	1997	キウス4遺跡(2)	千歳市	キウス4	24	377	121
57	北埋調報 125	平成9	1997	キウス5遺跡(5)A2地区	千歳市	キウス5	11	151	159

	シリーズ名称	発行年度	報告書名	所在地	遺跡名	掲載遺物コ ンテナ数	その他コ ンテナ数	復元土器 個体数	備考	
58	北埋調報 126	平成9	1997	キウス5遺跡(6)B・C地区	千歳市	キウス5	4	46	1	
59	北埋調報 127	平成9	1997	キウス7遺跡(5)	千歳市	キウス7	6	16	5	
60	北埋調報 128	平成9	1997	ユカンボシC15遺跡(1)	千歳市	ユカンボシC15	3	36	81	
61	北埋調報 133	平成10	1998	ユカンボシC15遺跡(2)	千歳市	ユカンボシC15	14	283	63	
62	北埋調報 134	平成10	1998	キウス4遺跡(3)AHKI地区	千歳市	キウス4	42	302	234	
63	北埋調報 135	平成10	1998	キウス4遺跡(4)A2地区	千歳市	キウス4	5	39	14	
64	北埋調報 136	平成10	1998	キウス5(7) キウス7(6)遺跡	千歳市	キウス5	1	0	0	
65	北埋調報 136	平成10	1998	キウス5(7) キウス7(6)遺跡	千歳市	キウス7	1	1	0	
66	北埋調報 138	平成11	1999	柏台1遺跡	千歳市	柏台1	26	22	0	
67	北埋調報 144	平成11	1999	キウス4遺跡(5)	千歳市	キウス4	11	33	40	
68	北埋調報 146	平成11	1999	ユカンボシC15遺跡(3)	千歳市	ユカンボシC15	1	46	14	
69	北埋調報 147	平成11	1999	対雁2遺跡(1)	江別市	対雁2	2	42	14	
70	北埋調報 148	平成11	1999	キウス4遺跡(6)	千歳市	キウス4	7	16	2	
71	北埋調報 152	平成12	2000	キウス4遺跡(7)	千歳市	キウス4	18	109	45	
72	北埋調報 157	平成12	2000	キウス4遺跡(8)	千歳市	キウス4	49	519	380	
73	北埋調報 159	平成12	2000	ユカンボシC15遺跡(4)	千歳市	ユカンボシC15	1	1	3	
74	北埋調報 160	平成12	2000	対雁2遺跡(2)	江別市	対雁2	5	32	41	
75	北埋調報 173	平成13	2001	チブニー1・チブニー2遺跡	千歳市	チブニー1	4	14	33	
76	北埋調報 173	平成13	2001	チブニー1・チブニー2遺跡	千歳市	チブニー2	1	5	0	
77	北埋調報 174	平成13	2001	ケネフチ9遺跡	千歳市	ケネフチ9	2	10	1	
78	北埋調報 176	平成13	2001	ユカンボシC15遺跡(5)	千歳市	ユカンボシC15	0	0	0	
79	北埋調報 177	平成13	2001	対雁2遺跡(3)	江別市	対雁2	1	6	69	
80	北埋調報 178	平成14	2002	西島松5遺跡	恵庭市	西島松5	68	218	97	
81	北埋調報 180	平成14	2002	キウス4遺跡(9)	千歳市	キウス4	90	1623	696	
82	北埋調報 187	平成14	2002	キウス4遺跡(10)	千歳市	キウス4	0	0	0	
83	北埋調報 188	平成14	2002	オリイカ1遺跡	千歳市	オリイカ1	2	32	2	
84	北埋調報 189	平成14	2002	オリイカ2遺跡	千歳市	オリイカ2	5	17	4	
85	北埋調報 192	平成14	2002	ユカンボシC15遺跡(6)	千歳市	ユカンボシC15	0	59	0	
86	北埋調報 193	平成14	2002	対雁2遺跡(4)	江別市	対雁2	41	81	36	
87	北埋調報 194	平成15	2003	西島松5遺跡(2)	恵庭市	西島松5	7	21	19	
88	北埋調報 204	平成15	2003	対雁2遺跡(5)	江別市	対雁2	3	5	11	
89	北埋調報 206	平成15	2003	オリイカ1遺跡(2)	千歳市	オリイカ1	1	2	2	
90	北埋調報 207	平成15	2003	チブニー2遺跡(2)	千歳市	チブニー2	2	12	12	
91	北埋調報 209	平成16	2004	西島松5遺跡(3)	恵庭市	西島松5	55	455	467	
92	北埋調報 215	平成16	2004	対雁2遺跡(6)	江別市	対雁2	0	1	0	
93	北埋調報 221	平成17	2005	オリイカ2遺跡(2)	千歳市	オリイカ2	23	34	10	
94	北埋調報 224	平成18	2006	西島松5遺跡(4)	恵庭市	西島松5	10	27	22	
95	北埋調報 225	平成17	2005	チブニー2遺跡(3)	千歳市	チブニー2	31	7	27	
96	北埋調報 226	平成17	2005	対雁2遺跡(7)	江別市	対雁2	16	38	41	
97	北埋調報 231	平成18	2006	対雁2遺跡(8)	江別市	対雁2	33	49	429	
98	北埋調報 238	平成18	2006	祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡	千歳市	梅川2	3	5	6	
99	北埋調報 238	平成18	2006	祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡	千歳市	祝梅川上田	5	9	4	
100	北埋調報 240	平成18	2006	対雁2遺跡(9)	江別市	対雁2	13	14	22	
101	北埋調報 248	平成20	2008	西島松3・5遺跡(5)	恵庭市	西島松5	33	486	140	
102	北埋調報 251	平成19	2007	キウス5遺跡(8)	千歳市	キウス5	3	17	10	
103	北埋調報 252	平成19	2007	キウス9遺跡	千歳市	キウス9	13	49	181	
104	北埋調報 253	平成20	2008	梅川4遺跡(1)	千歳市	梅川4	8	20	51	
105	北埋調報 255	平成18	2006	対雁2遺跡(10)	江別市	対雁2	1	2	4	
106	北埋調報 260	平成21	2009	西島松5遺跡(6)	恵庭市	西島松5	39	53	11	
107	北埋調報 265	平成21	2009	西島松2遺跡	恵庭市	西島松2	93	437	168	
108	北埋調報 267	平成21	2009	オリイカ2遺跡(3)	千歳市	オリイカ2	3	6	53	
109	北埋調報 268	平成21	2009	アンカリトー7・9遺跡	千歳市	アンカリトー7	3	10	3	
110	北埋調報 268	平成21	2009	アンカリトー7・9遺跡	千歳市	アンカリトー9	8	1	0	
111	北埋調報 269	平成21	2009	梅川4遺跡(2)	千歳市	梅川4	8	57	20	
(道教委・道埋文センター発掘調査分)						合 計	1,103	8,932	5,729	
1	保第 2	平成7	1995	ボンオサツ・ケネフチ5	千歳市	ボンオサツ	2	1	18	
2	保第 2	平成7	1995	ボンオサツ・ケネフチ5	千歳市	ケネフチ5	5	42	0	
3	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ15	1	14	1	
4	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ16	4	44	14	
5	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ18	1	1	0	
6	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ②・オサツ18②・ケネフチ5②	千歳市	ボンオサツ	1	1	0	
7	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ②・オサツ18②・ケネフチ5②	千歳市	オサツ18	1	1	8	
8	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ②・オサツ18②・ケネフチ5②	千歳市	ケネフチ5	5	14	2	
9	保第 6	平成8	1996	オサツ15(2)	千歳市	オサツ15	5	47	7	
10	保第 7	平成8	1996	オサツ16(2)	千歳市	オサツ16	13	28	8	
11	保第 8	平成9	1997	オサツ15(3)	千歳市	オサツ15	6	26	4	
12	保第 9	平成9	1997	オサツ16(3)	千歳市	オサツ16	2	14	0	
13	保第 10	平成9	1997	ケネフチ5(3)	千歳市	ケネフチ5	11	68	23	
(保護協会発掘調査分)						合 計	57	301	85	
総 合 計							1,160	9,233	5,814	

6 普及・啓発事業の概要

(1) 展示活動

a 常設展示「掘り出された北の歴史」

常設展示にあたっては、国（文化庁）をはじめ、函館市・北斗市・今金町・木古内町・余市町・登別市の各教育委員会、市立函館博物館、知内町郷土資料館、芦別市星のふる里百年記念館に、展示品借用についての協力を得ている。

また、テーマ展との関係から、展示室・ホールとの併用で展示を行っている。

[千歳市ママチ遺跡出土土面展示]

国指定重要文化財の「土面」（国保有、昭和63年6月6日指定）を常設展示している。「土面」は千歳市ママチ遺跡から昭和61年に出土、縄文時代晩期終末のもので、土面としては最も北方から出土したものである。

[遺跡調査と保護活用]

北海道内の遺跡分布、遺跡の調査・整理作業の実際、遺物の分析・保存処理の方法などについての解説。また国指定重要文化財の複製品も展示している。

[石の道具]

石は人類が最初に利用した素材の一つである。旧石器時代の石の道具は、破片の接合から高度な技術で製作されたことが明らかとなった。遠軽町(旧白滝村)白滝遺跡群、千歳市柏台1遺跡、今金町ピリカ遺跡（国指定史跡）、木古内町新道4遺跡出土の石器、接合資料などを展示した。また、縄文時代には用途に応じて、それに合う石材を利用し、様々な形の石器が作られた。その使用方法を図と復元模型でわかりやすく示している。

[木の道具]

木の道具は通常の遺跡では腐って残らないが、実際の生活の中では各所に使われていた。そのため低湿性遺跡など腐食しにくい状況で出土した木の道具は、昔の人々の生活の様子を大変良く伝えてくれる。千歳市美々8遺跡低湿部のアイヌ文化期の遺物のほか、ユカンボシC15遺跡の丸木舟、キウス4遺跡の縄文時代後期の脚付き容器などを展示している。展示品は保存処理後の遺物である。

千歳市美々8遺跡低湿部出土品は、平成17年6月9日国指定重要文化財に指定され、その一部を常設展示している。また、美々8遺跡の「美々ムラ」復元模型を置いている。

[金属の道具]

金属の道具は人類が新しく手にしたもの一つである。刀・刀子・鍋等は交易品として北海道に入ってきたものが多く、それら道具類を手に入れるための交易が、北海道社会を変容させる一つの要因となった。

金属製品も腐食しやすい材質であり、展示品は保存処理を行っている。

[土の道具：土と火の造形]

粘土を成形し火で焼き上げた土器は、人類が最初に手に入れた火にかけられる容器である。土器の使用により、食材の利用範囲が大きく拡大し、縄文時代の安定がもたらされたと考えられている。土器には自由な造形ができる粘土を使用しているため、時代とともに文様や形が様々な変化しており、時には機能を超越した、変わった形態や美しさをかもし出すものがある。

[こころの道具]

「装いところ」：身を飾った装身具には、ヒスイ製、コハク製などの各種玉、玦状耳飾り、土製の耳栓などがあり、当時の人々のおしゃれごころや精神生活の一端をみせてくれる。

「墓と副葬品」：墓の副葬品は、当時の生活用具をセットでみせてくれるとともに、当時の人々の「死」に対する恐れ、悲しみなど、「こころ」の一面をのぞかせてくれる。

「動物とひと」：動物意匠の土器、動物形石製品などは、人と動物とのふれあいを感じさせる。表現される動物たちに、何を感じ、何を求めていたのか、当時の人々の自然と対峙する生活の一端を考えさせられる。

[キウスの縄文村]

千歳市キウス4遺跡の発掘調査から、周堤墓、盛土遺構、住居跡などをジオラマに復元、合成樹脂で剥ぎ取った盛土遺構土層断面を展示している。盛土遺構の出土遺物には、祭祀に使われたと考えられる赤彩の土器、特殊な形の土器・土製品、玉類、土偶などがある。

[ビデオコーナー]

遺跡についてわかりやすく解説した『ビビちゃんとフクロウ博士の遺跡ってなーに』『ビビちゃんとフクロウ博士の発掘体験』『ビビちゃんとフクロウ博士の縄文生活体験』などを常時上映している。

[体験コーナー]

石器コーナー：石器を使ったドングリの皮むき、石器の接合、石器の紙切り体験。石器の材料となる石材見本展示。

火起し体験コーナー：モミキリ、ヒモキリ、マイキリによる火起し体験。

装身具コーナー：様々な材質のペンダント装着体験

土器コーナー：土器拓本体験、煮炊きに使った復元土器の展示

[常設展示点数一覧]

展 示 場 所 ・ コ ー ナ ー		遺物 点数	パネル・レプリカなど	合計 点数	
ホール・展示回廊		2	10	12	
常設展示室	受付・導入部分	3	11	14	
	「遺跡調査と保護活用」部分	遺跡調査	5	88	93
		遺物の保存と分析	1	110	111
	「石の道具」部分	旧石器時代の石器	87	10	97
		縄文時代の石器	181	15	196
	「木の道具」部分	縄文時代の木製品	6	15	21
		アイヌ文化期の木製品	44	38	82
	「金属の道具」部分	14	3	17	
	「骨の道具」部分	3	2	5	
	「土の道具」部分	140	28	168	
	「こころの道具」部分	装いところ	821	5	826
		墓と副葬品	105	3	108
		動物とひと	12	10	22
「キウスの縄文ムラ」部分	28	4	32		
「新しい時代へ」	17	2	19		
展示ホール	収蔵遺物の展示「美々4 こころの道具」	391	2	393	
屋外	エントランスひろば	0	1	1	
	中庭	0	1820	1820	
合 計		1860	2177	4037	

b 特別展示

○『わかる考古学 一縄文生活体験ひろば一展』

[会期] 平成21年7月18日(土)～8月30日(日)

[期間中入館者数] 1,967名

[展示のねらい]

勾玉づくりや土器づくりなどの体験学習や、拓本、写生による遺物の観察を通して、縄文時代の生活を学ぶことで埋蔵文化財への関心を高めることを目的とする。

縄文時代の生活を具体的に紹介し、勾玉づくりや土器づくり、石器使用などの体験を通して埋蔵文化財をより身近なものとして体感できる場とする。

[展示構成]

【縄文工房】(ホール)

実物を観察し、「カタログ」や「レシピ(つくりかた手順)」を参考にして自分で素材や道具を選び、縄文アクセサリーや土器・土製品をつくる体験ができる。主に以下の内容で製作体験ができる『縄文ネックレスに挑戦』：いろいろな種類の玉をつくり、組み合わせで腕輪やネックレスにする。

「勾玉をつくる」：滑石を磨いてミニチュア勾玉をつくる。

「丸玉・管玉・白玉・小玉をつくる」：滑石を磨いていろいろな種類の玉をつくる。

「縄文ペンダントをつくる」：滑石を磨いてペンダント(垂飾)をつくる。

「土製の玉をつくる」：オープン粘土を使って、土製玉をつくる。

「コハク玉をつくる」：コハク原石を磨いて勾玉や平玉をつくる

『耳飾りに挑戦』：粘土や滑石を用いて耳飾り、スタンプ形の飾りをつくる。

「土製耳飾り・耳栓をつくる」：オープン粘土を使って、土製の耳飾りをつくる。

「けつ状耳飾りをつくる」：滑石を磨いて玦状耳飾りをつくる。

『土面・土偶をつくる』：土面や土偶を展示室の実物を手本に粘土でつくる体験。

『ミニチュア土器を粘土でつくる体験』

『布を編む』：復元された縄文時代の方法で布を編む体験。

【体感教室】(展示廊下から体験コーナー、常設展示室)

土器や石器等、縄文時代の各時期の遺物を揃え、触れて観察する場をつくる。また、レプリカを使って道具の使用法を体験する。

『じょうもんタッチ』：土器や石器に直接触れて観察する。

『縄文模様図鑑をつくる』：本物の縄文土器から模様を写しとる「拓本」に挑戦する。

『火おこし』：きりもみ式、ひもぎり式、弓ぎり式での火おこし体験。

『砂絵で土器を描こう』：砂絵でいろいろな種類の土器を描きます。

『石器を使う』：ナイフで紙や皮を切り、たたき石で木の実をすりつぶすなどの体験

【来館ポイントシステム】

事前予約や時間割りに制約されることなく自由な体験を可能にするため、1日1回の来館をポイントとして換算し、その範囲内で体験素材や道具を入手することにより、準備する素材の数量や体験時間などに上限をもうける方法をとる。体験方法は全てセルフサービスとなる。

i 1日1回の来館は一人10ポイントに換算される。

ii 体験素材と使用する道具などはこのポイントにより入手する。

iii 体験学習の場であるため、素材や道具のみを持ち帰ることはできないこととする。

【その他】

数量に限りのあるものや準備の都合等により体験できない場合もある。

10名以上の団体来館の場合は事前に予約を必要とする。（「団体見学利用申込書」による）

[展示企画] 藤井 浩

付記：「縄文生活体験ひろば展」の広報と入館者数について

「縄文生活体験ひろば展」は、平成17年度から、主に夏休み期間中の児童・生徒向け体験型展示として実施している。平成18年度は夏休み期間中の体験コーナーイベントとして開催したほかは、特別展として開催した。年度によって名称と内容を少しずつ変え、よりわかりやすい展示を目指してきた。開催前には下記に記した近隣の小・中学校に広報を行っている。

平成17年度は江別市内の小・中学校29校、平成18年度は江別市内と札幌市の厚別区・清田区・白石区の小中学校107校、平成19年度は江別市、札幌市、北広島市、岩見沢市、当別町、新篠津村、南幌町、長沼町の小学校266校、平成20年度は江別市、札幌市、北広島市、岩見沢市、当別町、新篠津村、南幌町、長沼町、石狩市、恵庭市、千歳市の小学校402校に広報を行ってきた。平成21年度は江別市、札幌市、北広島市、岩見沢市、当別町、新篠津村、南幌町、長沼町、石狩市、恵庭市、千歳市、三笠市、美唄市、浦臼町、月形町、栗山町、小樽市、余市町、仁木町、赤井川村の小・中学校546校に広報を行った。

平成17年度から21年度の5年間で1,350校に広報を行い、期間中入館者数は延べ10,209名である。

「縄文生活体験ひろば展」の入館者数と広報

会期	期 間 日 数	平成17年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度		平成21年度		計
		6/24~8/28	7/26~8/31	7/7~8/26	7/7~8/26	7/18~8/30						
期 間	中 入 館 者 数	2,121	1,603	2,734	1,784	1,967	10,209					
	1 日 当 た り の 入 館 者 数	37	50	62	56	52	257					
実 施 形 態		特 別 展		体 験 コ ー ナ ー イ ベ ン ト		特 別 展		特 別 展		特 別 展		
広 報 の 範 囲		小 学 校	中 学 校	小 学 校	中 学 校	小 学 校	中 学 校	小 学 校	中 学 校	小 学 校	中 学 校	
	江 別 市	19	10	19	10	19		19		19	11	126
	札 幌 市			53	25	209		209		209	98	803
	北 広 島 市					10		10		10	7	37
	岩 見 沢 市					15		15		15	10	55
	当 別 町					4		3		3	3	13
	新 篠 津 村					1		1		1	1	4
	南 幌 町					3		3		3	1	10
	長 沼 町					5		5		5	3	18
	石 狩 市							14		14	8	36
	恵 庭 市							8		6	5	19
	千 歳 市							17		17	9	43
	三 笠 市									5	3	8
	美 唄 市									7	4	11
	浦 臼 町									1	1	2
	月 形 町									2	1	3
栗 山 町									3	2	5	
小 樽 市									27	14	41	
余 市 町									6	3	9	
仁 木 町									3	2	5	
赤 井 川 村									3	1	4	
計		19	10	72	35	266	0	402	0	359	187	1,350
		29		107		266		402		546		

○『動物の考古学 —イノシシ・ブタからみた北海道の歴史—展』

[会期] 平成21年9月19日(土)～11月15日(日)

[展示のねらい]

北海道は、ブラキストン線の北側に位置し、イノシシの自然分布域からはずれている。そのため、イノシシの骨や牙、それらを加工した製品が出土すると人間により持ち込まれた可能性が高い。

北海道の縄文時代・続縄文時代にはイノシシが、オホーツク文化期にはカラフトブタが出土しており、前者は本州から、後者は沿海地方からもたらされたようである。さらに近年は、DNAを利用した分析も行われ、出土遺体からどこからその動物がもたらされたか、わかるようになってきている。

これらの成果を踏まえて、本州やサハリン、沿海地方との間にみられるさまざまな交流の一端を確認しながら、北海道の歴史的特色を明らかにしてみたい。

[協力機関]

北海道大学植物園、北海道大学総合博物館、北海道開拓記念館、千歳市教育委員会、函館市教育委員会、市立函館博物館、洞爺湖町教育委員会、釧路市埋蔵文化財調査センター、酪農学園大学、酪農学園大学家畜センター 上野光敏氏

[展示構成]

0 はじめに 0-1 イノシシとブタの違いは 0-2 北海道の遺跡調査とイノシシ・ブタ

1 北海道の縄文時代・続縄文時代のイノシシ 1-1 遺体 1-2 骨牙製品 1-3土製品

2 オホーツク文化期のブタ 2-1 遺体 2-2 骨製品

3 分析の方法—骨とDNA

4 ブタふたたび—北海道の畜産におけるブタ—

〈コラム〉現代の北海道におけるブタ利用

A 古い形質のブタをブランド豚へ—酪農学園大学『酪豚』—の試み

B 現代におけるイノシシ・ブタ利用

[展示企画] 倉橋直孝

○北海道遺跡百選 2—(財)北海道埋蔵文化財センターの調査から—

「美々4 —こころのどうぐ—」展

[会期] 平成21年12月19日(土)～平成22年3月7日(日)

[展示のねらい]

北海道の代表的な遺跡を取り上げて、わかりやすく紹介することで、遺跡や埋蔵文化財への関心を高めることを目的とする。特別展示「北海道遺跡百選」は、「遺跡との出会い」をテーマに北海道の代表的な遺跡を紹介するもので、今回は(財)北海道埋蔵文化財センターの調査から千歳市の美々4遺跡を取り上げた。美々4遺跡の調査は新千歳空港の建設に伴って行われ、昭和51年から平成7年までの長きにわたって続けられた。その間、縄文時代の周堤墓、盛土墳墓やヒスイの玉、石棒、漆塗り櫛、動物形土製品、土偶などの豊富な遺構や遺物が発見されました。特に動物形土製品は国の重要文化財にも指定されている。今回の展示では、発掘調査の成果を紹介するとともに、北海道の縄文文化を特徴づけた周堤墓や盛土墳墓などから出土した遺物群を中心に展示し、日常生活の道具としてではない、「こころのどうぐ」のもつ魅力に触れていただきたい。

[展示構成]

これまでの発掘調査の成果を紹介するとともに、北海道の縄文文化を特徴づけた集団墓出土の遺物群を主に展示する。

i 美々4を掘る

美沢川流域の遺跡群と美々4遺跡

発掘調査の歩みと遺構、遺物出土の様子を写真パネルで紹介する。

ii 美々4と「こころのどうぐ」

集団墓の各遺構から出土した遺物を整理し、展示する。

周堤墓（X-2・3）、周溝墓（BS-3・4）、盛土墳墓群、縄文後・晩期の土壙墓群など。

iii 美々4を知る

周堤墓、周溝墓など、展示に関連する用語をわかりやすく解説し、美々4遺跡の特徴について紹介する。

iv 美々4に触れる

土器、石器などのタッチコーナーを設置する。

v 美々4をつくる

動物形土製品「ビビちゃん」のミニチュアの作成体験のコーナーを設置する。

（常設展示室体験コーナーにて実施）

[展示企画] 藤井 浩

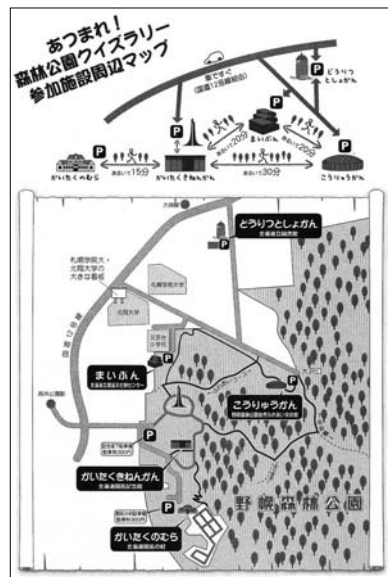


d 周辺施設との連携

北海道開拓記念館が主体となり、周辺施設と連携してゴールデンウィーク期間中に行う「あつまれ！森林公園クイズラリー2009」に参加した。平成18年度から毎年何らかのラリーを行っている。期間中（5日間）の参加者は1,103名、来館者は768名であった。

「あつまれ！森林公園クイズラリー2009」開催要項（北海道開拓記念館教育普及課作成）

- 主 催：北海道開拓記念館・北海道開拓の村・自然ふれあい交流館・北海道立図書館・北海道立埋蔵文化財センター
- 対 象：参加制限を設けず全世代
- 開 催 日：2009年5月2日（土）～6日（水）5日間
- 開催場所：北海道開拓記念館・北海道開拓の村・自然ふれあい交流館・北海道立図書館・北海道立埋蔵文化財センター
- 実施内容：各参加者は、任意の施設からスタートキットを受領してスタートする。各施設ごとにクイズを1問出題するので、それに回答して正解すると各施設のスタンプを押す。3施設目で記念品を受領し、5施設目でパーフェクト賞としてラミネートされたパーフェクト賞カードをもらう。
 スタート（受付）時間 9時30分～16時00分（最終日は15時00分で締め切り）
 ゴール時間 各施設の閉館時間まで
- 内 容：事前申込は不要。
 - ・スタートは（受付）は、5施設のいずれでも可能。
 - ・参加希望者は、受付時間内に5施設のいずれかに来て受付する。
 - ・スタート地点でスタートキットを受け取る。
 - ・参加者は5日間のうちに好きな順序・好きなペースで5施設を訪ね、各施設で出題されたクイズに回答して正解すると各施設のスタンプを押してもらう。
 - ・3施設目で記念品を受領し、5施設目でパーフェクト賞としてラミネートされたパーフェクト賞カードをもらう。
 - ・ゴールも、いずれの施設でも可能。



(2) 講演会・報告会 (道民カレッジ連携講座)

a 『(財)北海道埋蔵文化財センター平成20年度発掘調査報告会』

[日 時] 平成21年4月11日(土) 13:30~16:30

[会 場] 2階研修室

[内 容] 平成20年度に財団法人北海道埋蔵文化財センターが調査を行った遺跡のうち、次の遺跡について、スライドを使用して発掘成果の報告を行った。また、成果展会場では、報告者による展示解説を行った。

- | | |
|--------------------|------|
| (1) 千歳市アンカリトー1遺跡 | 愛場和人 |
| (2) 千歳市祝梅川上田遺跡 | 広田良成 |
| (3) 千歳市梅川4遺跡 | 酒井秀治 |
| (4) 千歳市祝梅川小野・梅川1遺跡 | 芝田直人 |
| (5) 北斗市館野2遺跡 | 皆川洋一 |
| (6) 釧路市天寧1遺跡 | 鈴木宏行 |
| (7) 遠軽町旧白滝3遺跡 | 坂本尚史 |

[参加者] 83名(うち道民カレッジ講座参加者は37名)

[企画] 財団法人北海道埋蔵文化財センター調査部

b 秋季講演会『動物の考古学—イノシシ・ブタ・イヌ』

[日 時] 平成21年10月3日(土) 13:30~15:30

[会 場] 2階研修室

[講師] 国立歴史民俗博物館教授 西本豊弘 氏

[内 容] 講師の動物考古学研究の中からイノシシ・ブタ・イヌについてわかりやすく解説していただいた。

[参加者] 42名(うち道民カレッジ講座参加者は10名)

[企画] 倉橋直孝

c 冬季講演会 『正倉院宝物の曝涼』

[日 時] 平成21年12月19日(土)
13:30~15:30

[会 場] 2階研修室

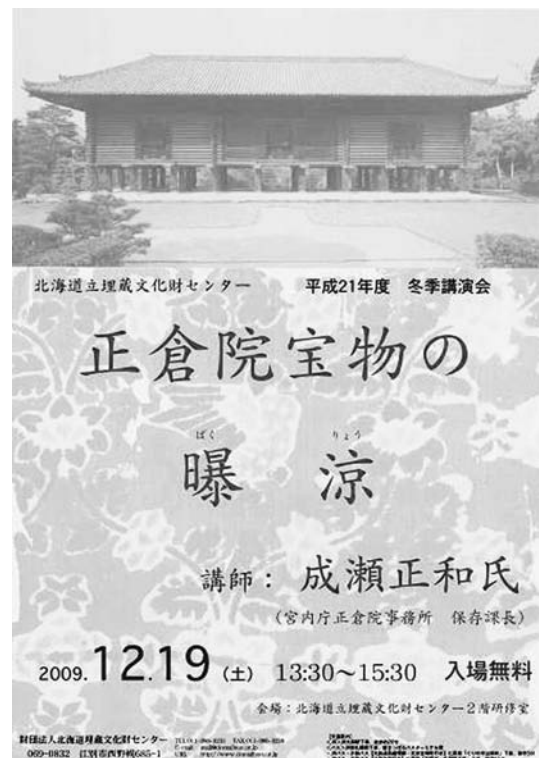
[講師] 宮内庁正倉院事務所
保存課長 成瀬正和 氏

[内 容] 一般の方にあまり知られていない正倉院における仕事についてわかりやすく紹介していただいた。

[参加者] 121名(うち道民カレッジ講座参加者は17名)

[企画] 倉橋直孝

* b・cの詳細は、講演会要旨を参照。



(3) **考古学教室** (道民カレッジ連携講座)

a **第1回 「ガラス玉づくり1」**

[日 時] 平成21年6月20日(土)

13:30~15:30

[講 師] 装飾タイル作家 宮崎幸子

[参加者] 15名(うち道民カレッジ講座参加者は1名)

[内 容] 北海道の遺跡からは様々なガラス玉が出土する。ガラス玉の歴史を学ぶとともに、作り方についての説明と、実際にガラス玉づくりを体験した。

北海道内から出土するガラス玉がどのように作られていったのか、色の取り合わせがどのようになされるのかなどを解明するためには、製作技法を理解することが重要。ガスバーナーと市販のガラス棒を使った方法で、実際に丸い玉を作って、整形の難しさ、大きな玉を作ることのむずかしさなどを体験した。「ガラス玉づくり1・2」ともに同内容で行った。



ガラス玉づくり1



ガラス玉づくり2

b **第2回 「ガラス玉づくり2」**

[日 時] 平成21年6月27日(土)

13:30~15:30

[講 師] 装飾タイル作家 宮崎幸子

[参加者] 13名(うち道民カレッジ講座参加者は3名)

[内 容] 「ガラス玉づくり1」と同様。



竪穴住居模型づくり

c **第3回 「竪穴住居模型づくり」**

[日 時] 平成21年9月5日(土)

13:30~15:30

[講 師] 財団法人北海道埋蔵文化財センター 普及活用課主査 藤井 浩

[参加者] 15名(うち道民カレッジ講座参加者は10名)

[内 容] 竪穴住居の模型づくりを通して、その仕組みや変遷、調査の方法などを学ぶ。

d 第4回 「石器づくり」

[日 時] 平成21年11月28日(土) 13:30~15:30

[講 師] 財団法人北海道埋蔵文化財センター主任 直江康雄

[参 加 者] 15名(うち道民カレッジ講座参加者は2名)

[内 容] 石器がどのようにつくられ、どのように使われてきたのかを実物を通じて紹介し、実際に黒曜石を素材にした石器づくりを行った。今年度は手持ちナイフを例として石器づくりの基本原理や刃部の作り方などの石器づくりの概要を説明した後、ナイフをつくる実習を行った。

e 第5回 「考古学入門講座」

[日 時] 平成21年12月12日(土) 13:30~15:30

[講 師] 財団法人北海道埋蔵文化財センター 普及活用課主査 倉橋直孝

[参 加 者] 17名(うち道民カレッジ講座参加者は4名)

[内 容] 入館者の方々から受ける質問事項に、①遺跡があるのをどのように知るか、②考古学の用語について調べたい、③遺跡の報告書を探したい、④考古学関係の展覧会情報を知りたい、などがある。今年度は文献やインターネットを利用して、これらの調べ方について解説した。

f 第6回 「拓本講座」

[日 時] 平成22年3月13日(土) 13:30~15:30

[講 師] 財団法人北海道埋蔵文化財センター 普及活用課主査 藤井 浩

[参 加 者] 13名(うち道民カレッジ講座参加者は2名)

[内 容] 墨と画仙紙を使って土器の文様を写しとる「拓本」の講座。乾拓と湿拓の違いを体験した後、拓本実習を行った。土器の破片から全体像を想像できること、時期によって様々な形や模様があることを知っていただくために復元土器の時代並べのクイズを行った後、縄文時代早期から擦文時代まで各時代の土器片の拓本に挑戦していただいた。完成した拓本はオリジナルアルバムに整理・保管できるようにした。



石器づくり



拓本講座

(4) こども考古学教室

a 「夏休み親子考古学教室」第1回・第2回

[期 日] 第1回 平成21年7月25日(土)、第2回 平成21年8月1日(土)

[参 加 者] 第1回 23名、第2回 51名

[内 容] 火おこし体験と勾玉づくりを中心にした、小中学生の親子向けの考古学入門講座。展示収蔵庫ツアー・展示室体験クイズラリー・勾玉づくり・火おこし体験などを行った。

[企 画] 藤井 浩

b 写生会「ビビちゃんと描く縄文の世界」

[期 日] 平成21年7月18日(土)～8月30日(日)

[目 的] 埋蔵文化財センターにある遺物や展示物などを写生することで、埋蔵文化財と深く触れあう機会を提供し、埋蔵文化財保護への理解を深めてもらう。

[参 加 者] 76名

[内 容] 絵の道具(水彩絵の具・クレヨン・鉛筆など)を持参してもらい、当方で用意した画用紙に埋蔵文化財センターにある土器・石器等の遺物、展示物を題材に写生会を実施した。作品は当センターにて展示させていただいた。

[企 画] 藤井 浩

c 「冬休み縄文生活体験ひろば」

[期 日] 平成22年1月5日(火)～17日(日)

[目 的] 体験学習を中心にした考古学入門講座を通して、埋蔵文化財への関心を高めることを目的とした。

[内 容] 展示室の遺物を手本にして、大昔の道具の復元や生活の体験を行う。

- ・ミニチュア土器をつくろう ・縄文時代の土製品(耳飾り・土偶・仮面など)をつくろう
- ・ミニチュア勾玉をつくろう ・火おこしに挑戦しよう ・小さな小さな発掘体験

[企 画] 藤井 浩



夏休み親子考古学教室



冬休み親子考古学教室

d 「冬休み親子考古学教室」第1回・第2回

[期 日] 第1回 平成22年1月9日(土)

第2回 平成22年1月16日(土)

[参加者] 第1回 23名

第2回 21名

[内 容] 勾玉づくりと展示室体験を中心にした、小中学生向けの考古学入門講座。

・ビデオによる入門講座・おこし体験・勾玉づくり・展示室体験クイズラリー

[企 画] 藤井 浩

e 冬休み親子写真撮影会

[期 日] 平成22年1月5日(土)～17日(日)

[目 的] 親子で埋蔵文化財センターにある遺物や展示物などを写真に撮影することで、埋蔵文化財と深く触れあう機会を提供し、埋蔵文化財保護への理解を深めてもらうことを目的とした。作品は当センターにて展示させていただいた。

[参加者] 12名(20作品)

[企 画] 藤井 浩

(5) 考古学教室出前講座

a 事業目的

完全学校週5日制に対応し、土曜日や日曜日の休日に、市町村教育委員会との連携の下で、子供たちにとってわかりやすく地域の歴史や文化を説明するとともに、それらを大切にすることを養い、体験学習を通じて豊かな人間性や多様な個性を育むことを目的とする。

これまで、道立センター内で行ってきた考古学教室を、全道の市町村に出向いて地元教育委員会と連携を図って実施することにより、市町村独自事業実施の契機となるよう努める。

b 事業内容

(1) 地域の遺跡を学ぶ - 実物にふれてみよう - (40分程度)

地元市町村出土の遺物や北海道立埋蔵文化財センター保管の土器・石器類に実際に触れてもらいながら、地元市町村の埋蔵文化財についての説明を行う。あわせて、埋蔵文化財紹介のビデオ『遺跡ってなーに』を鑑賞する。

(2) 体験学習 - 勾玉づくり - (2時間程度)

子供たちの歴史・文化に対する関心をより高めるために、縄文時代等にアクセサリーとして使用されていた「勾玉」を、滑石を材料に紙ヤスリなどで実際に製作する。また、時間の許す限り、石器(黒曜石破片)での紙切り、火おこしなどの体験学習を行う。

c 実施報告

今回7か所の実施市町村では、社会教育事業として実施した。実施時期は募集時期の兼ね合いもあり、7月・9月が多い。

最近、出前講座が社会教育関連事業として位置付けられることが多く、市町村関係者への普及という本来の趣旨が理解されていないことが多くなりつつある。募集時の説明、案内などを改善する必要があると感じている。

d 実施市町村一覧

(「考古学教室出前講座」事業分)

	市町村名	実施場所	実施日	参加人数	担当	備考
1	釧路町	ふるさと陶芸館「ほたる」	平成21年7月4日(土)	48名	鎌田・藤井	「考古学を楽しもう! 勾玉づくり!」
2	中富良野町	中富良野町公民館	平成21年8月8日(土)	38名	鎌田・藤井	「勾玉づくりで考古学を楽しもう」
3	長万部町	長万部町民センター、長万部町福祉センター	平成21年8月22日(土)	32名	鎌田・倉橋	長万部町第2回わくわく体験塾「楽しい考古学教室・勾玉づくりに挑戦」
4	小平町	小平町文化交流センター埋文資料館オピラウシ	平成21年8月29日(土)	15名	倉橋・藤井	おびらっこクラブ「北海道立埋蔵文化財センターの考古学出前講座」
5	羽幌町	羽幌町中央公民館	平成21年9月6日(日)	28名	鎌田・藤井	羽幌町自然クラブ「考古学出前講座 勾玉づくりに挑戦」
6	雨竜町	雨竜町公民館	平成21年9月12日(土)	37名	鎌田・倉橋	2009ちびっこチャレンジ教室 PART6「親子でチャレンジ! まが玉づくり体験教室」
7	喜茂別町	喜茂別町農村環境改善センター	平成22年2月27日(土)	26名	倉橋・藤井	平成21年度町民講座「考古学教室出前講座」勾玉づくりを体験してみよう

(「考古学教室出前講座」依頼分)

	市町村名	実施場所	実施日	参加人数	担当	備考
1	北広島市	北広島市立東部中学校	平成21年5月19日(火)	55名	藤井	歴史科目授業 選択社会
2	北広島市	北広島市立広葉小学校	平成21年6月5日(月)	48名	藤井	歴史科目授業
3	北広島市	北広島市立大曲小学校	平成21年6月18日(金)	53名	藤井	総合学習 歴史授業
4	北広島市	北広島市中央公民館	平成21年6月28日(日)	100名	藤井	北広島市中央公民館 第11回ワクワク公民館こどもまつり
5	江別市	江別市立江別第二小学校	平成21年7月21日(月)	124名	鎌田・倉橋・藤井	総合学習 歴史授業
6	当別町	当別町立当別小学校	平成21年12月5日(土)	23名	藤井	当別町地域子ども教室 わくわくキッズ「まがたまづくり」
7	当別町	当別町立当別小学校	平成22年2月19日(金)	35名	藤井	4年1組学級レクリエーション「勾玉づくり」
8	北広島市	北広島市立広葉中学校	平成22年3月18日(木)	75名	藤井	2年生社会科選択授業

(6) 研修会

- [名 称] 平成21年度埋蔵文化財担当職員研修会「土器分類の実際10」
- [目 的] 発掘調査に携わる市町村職員等を対象に、土器の分類についての専門的な研修を行い、今後の調査、普及啓発活動に寄与することを目的とする。
- [講 師] 大沼忠春氏（元北海道教育庁生涯学習推進局文化・スポーツ課主幹）
- [日 時] 平成22年2月5日（金） 10：30～16：30
 （日程） 10：00 受付開始
 10：30 主催者挨拶 第1 調査部長 越田賢一郎
 10：40～12：00 研修1 「学史」
 13：00～16：30 研修2 「縄文の施された土器（縄文時代草創期～続縄文）」
- [会 場] 2階研修室
- [内 容] 土器分類に関する基礎知識についての研修。これまで9回にわたって行ってきた「土器分類の実際」の補遺編。これまでに紹介できなかった縄文の施された土器（縄文草創期～続縄文）の分類に関する情報の追加及び土器分類を行う際の留意点についての研修を行った。
- [参 加 者] 市町村職員等 37名 北海道埋蔵文化財センター職員 25名

研修参加者一覧（埋文センター職員を除く）

	名 前	支庁	所 属				
1	田 中 亮	石狩	札幌市観光文化局文化部 文化財課埋蔵文化財係	20	菅 野 修 広	登別市教育委員会	
2	榊 田 朋 広			21	三 谷 智 広		洞爺湖町教育委員会
3	平 野 祐			22	三 谷 綾 乃		
4	長 町 章 弘		恵庭市郷土資料館	23	乾 哲 也	胆振 厚真町教育委員会	
5	南 友香子		江別市郷土資料館	24	天 方 博 章		
6	石 神 敏	後志 小樽市教育委員会	25	山 田 和 史			
7	福 田 裕 二	渡島	函館市教育委員会	26	奈 良 智 法		日高 沙流川歴史館
8	時 田 太 一 郎		七飯町歴史館	27	森 岡 健 治		
9	山 田 央		松前町教育委員会	28	川内谷 修		
10	平 山 わ と	檜山	上ノ国町教育委員会	29	北 沢 実	十勝 帯広百年記念館	
11	塚 田 直 哉		今金町教育委員会	30	大 橋 毅		十勝 芽室町教育委員会
12	宮 本 雅 通	空知	夕張市教育委員会	31	坪 岡 始	釧路 標茶町郷土館	
13	源 藤 隆 一		夕張市教育委員会	32	熊 崎 農 夫 博		釧路 厚岸町海事記念館
14	高 畠 孝 宗	宗谷	オホーツクミュージアムえさし	33	小 野 哲 也	根室 標津町ポー川史跡自然公園	
15	澤 田 健	上川	富良野市博物館	34	高 橋 和 樹		
16	八重柏 誠	網走	美幌博物館	35	中 田 裕 香	北海道教育庁文化・スポーツ課	
17	門 間 勇		斜里町埋蔵文化財センター		36		藤 原 秀 樹
18	原 靖 寿				37		工 藤 研 治
19	村 本 周 三						

(7) 特別利用等の状況

a 特別利用一覧

番号	利用者	使用目的	使用期間	利用資料名	備考
1	中澤寛将	資料調査	平成21年5月8日	内外面黒色土器・壺『美沢川流域の遺跡群XVI』図Ⅲ-44-24、青銅製装飾品 美々8遺跡『美沢川流域の遺跡群XVII』	
2	宇部則保	資料調査	平成21年5月10日	千歳市ママチ遺跡（北埋調報26掲載）AH-1,2出土土器	
3	高倉 純	資料調査	平成21年5月24日	白滝遺跡群出土土器	
4	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成21年6月2日	白滝遺跡群出土土器	
5	八戸市縄文学習館 副参事 宇部則保	資料調査	平成21年7月11日～14日	千歳市美々8遺跡出土擦文土器他	
6	大韓民国財文化財研究所 張 順子	資料調査	平成21年7月30日～8月14日	白滝遺跡群出土土器ほか	
7	株式会社 玉川文化財研究所 佐々木竜郎	報告書作成のための資料調査	平成21年8月11日	美々4遺跡土製品	
8	物質文化研究所 一芦舎 名久井文明	資料調査	平成21年9月1日	千歳市美々3遺跡出土石斧など	
9	北海道恵庭北高等学校 菅 静雄	高文連作品（アニメーション）に使用	平成21年9月4日	千歳市美々4遺跡出土動物形土製品（複製）	
10	東京大学大学院 役重みゆき	資料調査	平成21年9月7日～9月9日	千歳市柏台1遺跡群出土土器など	
11	國學院大學 清水 香	資料調査	平成21年12月25日	千歳市ユカンボシC15遺跡出土木製品、千歳市美々8遺跡出土木製品	重要文化財指定物件及び常設展示出展遺物を含むので注意を要する
12	北海道大学大学院 荒山千恵	資料調査	平成22年1月21日	千歳市美々8遺跡出土木製品（堅榿）、千歳市ユカンボシC15遺跡出土木製品（堅榿）	重要文化財指定物件を含むので注意を要する
13	北海道大学 荒山千恵	資料調査	平成22年2月14日	千歳市ユカンボシC15遺跡出土縦榿	
14	北海道大学 小野裕子	資料調査	平成22年2月25日	千歳市キウス9遺跡出土擦文土器	

b 複写品等使用承認一覧

番号	申請者	使用目的	利用資料・点数	備考
1	中央大学通信教育部 部長 中島康子	中央大学通信教育学部教科書『歴史（日本史）』に使用のため	北斗市茂別遺跡出土土器写真デジタルデータ 1点	
2	種市幸生	札幌大学講義に使用のため	小樽市忍路土場遺跡写真ほか写真デジタルデータ 53点	
3	株式会社郷土出版社 代表取締役社長 神津良子	『図説 帯広・十勝の歴史』に使用のため	音更町西昭和2遺跡出土石槍集中出土写真ほか写真デジタルデータ 2点	
4	第一法規株式会社 代表取締役社長 田中英弥	『月刊文化財』548号に使用のため	白滝黒曜石露頭写真ほか 写真デジタルデータ 5点	
5	洞爺湖町教育委員会 教育長 真屋敏春	『縄文シティサミットinとうや湖』開催に伴う特別展に使用のため	知内町湯の里5遺跡環状列石写真ほか写真デジタルデータ 14点	
6	株式会社 新泉社 代表取締役 石垣雅設	堤隆著『旧石器時代入門』（仮題）に使用のため	千歳市柏台1遺跡出土細石刃・石核写真ほか写真デジタルデータ 2点	
7	有限会社 コーベット・フォトエージェンシー 代表取締役 丹羽方人	『グラフィックワイド歴史』東京法令出版発行に使用のため	遠軽町上白滝8遺跡出土細石刃写真、千歳市美々5遺跡出土塊状耳飾写真 写真デジタルデータ 2点	
8	江別市教育委員会 教育長 月田健二	江別市郷土資料館ロビー展に使用のため	江別市大麻1遺跡調査状況写真ほか写真デジタルデータ 6点	
9	吉川弘文館 編集第一部 部長 早川邦武	『史跡で読む日本の歴史1 列島文化のはじまり』に使用のため	遠軽町上白滝8遺跡出土接合資料写真 写真転載 1点	
10	株式会社同成社 代表取締役 山脇洋亮	『ものが語る歴史19 漆の考古学』に使用のため	小樽市忍路土場遺跡出土樹皮製容器ほか 写真デジタルデータ 2点、写真転載 1点	
11	株式会社同成社 代表取締役 山脇洋亮	『ものが語る歴史19 漆の考古学』に使用のため	恵庭市西島松5遺跡出土漆塗櫛写真ほか 写真デジタルデータ 2点、千歳市キウス5遺跡出土漆塗櫛写真 写真デジタルデータ 1点、計3点	
12	千歳市 総務部 主幹 大谷敏三	『新千歳市史 通史編・上巻』に使用のため	千歳市美々8遺跡出土小刀樹皮製鞘と山刀柄写真ほか 写真デジタルデータ 10点	

番号	申請者	使用目的	利用資料・点数	備考
13	吉川弘文館 編集第一部 部長 早川邦武	『史跡で読む日本の歴史1 列島文化のはじまり』に使用のため	遠軽町上白滝8遺跡全景写真 写真デジタルデータ 1点	
14	藤井 浩	新聞連載記事への掲載のため	八雲町野田生1遺跡出土赤彩注口土器写真 写真デジタルデータ 1点	
15	サイモン・ケイナー	Arts of Asiaに使用のため	千歳市ママチ遺跡出土土面写真 写真転載 1点	
16	株式会社同成社 代表取締役 山脇洋亮	岡村道雄『漆の考古学』（仮）に使用のため	恵庭市西島松3遺跡出土漆塗り帯状繊維製品写真 写真デジタルデータ 11点	
17	伊達市噴火湾文化研究所 所長 大島直行	北の縄文文化を発信する会HPに使用のため	小樽市忍路土場遺跡作業場写真ほか 写真デジタルデータ 4点	
18	森町教育委員会 教育長 磯邊吉隆	森町遺跡案内本に使用のため	森町森川3遺跡完掘写真ほか 写真デジタルデータ 4点	
19	北海道近代美術館 館長 相馬秋夫	「A☆MUSE☆LAND☆TOMORROW 2010 ARCHAIC FANTASY」展に使用のため	千歳市美々4遺跡出土土偶写真 写真デジタルデータ 1点	
20	北方民族博物館指定管理者 理事長 遠藤隆也	「北海道土偶名品選」展写真パネルに使用のため	千歳市キウス4遺跡盛土遺構写真ほか 写真デジタルデータ 8点	
21	遠軽町長 佐々木修一	白滝黒曜石遺跡ジオパーク看板デザインに使用のため	遠軽町奥白滝1遺跡出土舌尖頭器写真 写真複写 1点	
22	富永勝也	南北海道情報交換会事例報告に使用のため	函館市中野A遺跡出土くぼみ石写真ほか 写真デジタルデータ 41点	
23	横山英介	南北海道情報交換会事例報告に使用のため	函館市中野B遺跡出土I群E類土器写真ほか デジタルデータ 4点	
24	株式会社同成社 代表取締役 山脇洋亮	小林達雄編『世界遺産 縄文遺跡』に使用のため	余市町西崎山環状列石第1区写真ほか 写真デジタルデータ 4点	
25	(南エディット・サポ 渡辺京子	『週刊 世界百不思議』45号（講談社）に使用のため	千歳市ママチ遺跡出土土面写真 写真デジタルデータ 1点	
26	文化庁文化財記念物 課長 申田俊巳	『発掘調査のてびき 集落遺跡発掘編』および『発掘調査のてびき 整理・報告書編』の図版の一部として使用のため	遠軽町奥白滝1遺跡（7）石刃核ほか、上白滝5遺跡（5）Sb-5接合資料 写真複写 2点	
27	株式会社 ぎょうせい 代表取締役 澤田裕二郎	日本の美術527『土偶とその周辺Ⅱ（縄文後期～晩期）』に掲載のため	千歳市美々4遺跡土偶出土状況ほか 写真デジタルデータ 3点	
28	江別市教育委員会 教育長 月田健二	江別ガイドブックシリーズV『江別の遺跡をめぐる』に使用のため	江別市大麻1遺跡OH-5調査状況ほか 写真デジタルデータ 10点	

c 資料貸出承認一覧

番号	申請者	使用目的	貸出資料名および点数	備考
1	毎日新聞社 北海道支社 支社長 武田芳明	シンポジウム「北の縄文遺跡群の魅力を考える」会場での展示のため	函館市著保内野遺跡出土中空土器複製 1点	
2	余市町教育委員会 教育長 武藤 寿	平成21年度余市水産博物館特別展にて展示活用のため	函館市著保内野遺跡出土中空土器複製ほか 4点	
3	北海道立近代美術館 館長 相馬秋夫	北海道立近代美術館「アミューズランド トゥモロー2010展」に出品のため	千歳市美々4遺跡出土土偶1点、千歳市美々4遺跡動物形土製品（複製）1点	
4	北海道立北方民族博物館指定 管理者 （助）北方文化振興協会 理事長 遠藤隆也	北海道立北方民族博物館ロビー展に出品のため	国宝中空土偶複製1点、千歳市美々4遺跡出土土偶など（複製を含む）25点	

7 利用状況など

今年度のセンター利用者は、前年度より微増している。ゴールデンウィーク期間中に周辺施設（北海道開拓記念館、北海道開拓の村、自然ふれあい交流館、北海道立図書館）と連携して行った「歴史発見！自然発見！ウォークラリー2009」と夏休み期間中の児童・生徒向け体験型の展示開催時に入館者が増加した。

(1) 入館者一覧

月別入館者数一覧

月	開館日数	大人(男性)	大人(女性)	子供	合計
平成21年 4月	26	665	370	157	1192
平成21年 5月	27	751	656	571	1978
平成21年 6月	25	361	321	252	934
平成21年 7月	27	479	387	671	1537
平成21年 8月	27	438	429	503	1370
平成21年 9月	24	407	363	399	1169
平成21年10月	27	489	443	188	1120
平成21年11月	24	379	293	73	745
平成21年12月	21	318	209	50	577
平成22年 1月	24	266	170	80	516
平成22年 2月	23	181	57	136	374
平成22年 3月	23	214	191	67	472
合計	298	4948	3889	3147	11984

暦年入館者数一覧

月	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	合計
4月		758	656	545	538	831	595	830	669	904	1192	7518
5月		709	453	656	1081	964	716	1440	1228	1403	1978	10628
6月		652	621	808	1299	1054	858	768	1099	1150	934	9243
7月		527	303	633	922	828	1124	1138	1425	1126	1537	9563
8月		673	388	662	789	747	851	1238	1517	1267	1370	9502
9月		544	374	631	762	1020	727	790	907	768	1169	7692
10月		650	302	649	991	1027	773	945	939	1267	1120	8663
11月	1988	467	659	445	836	669	618	669	627	653	745	8376
12月	687	286	326	669	505	330	318	232	536	488	577	4954
1月	593	218	411	287	229	189	240	462	633	488	516	4266
2月	366	129	240	212	270	187	189	226	329	450	374	2972
3月	469	221	362	297	331	296	366	329	528	549	472	4220
合計	4103	5834	5095	6494	8553	8142	7375	9067	10437	10513	11984	75613

は最多（平成11年度除く）

特別展示期間中の入館者

展 示 タ イ ト ル	期 間	入館者数
「(財)北海道埋蔵文化財センター平成20年度発掘調査成果展」	平成21年 3月27日～6月 8日	3494名
「わかる考古学—縄文生活体験ひろば—展」	平成21年 7月18日～8月30日	1967名
「動物の考古学—イノシシ・ブタからみた北海道の歴史—展」	平成21年 9月19日～11月15日	1885名
「北海道遺跡百選2—北海道埋蔵文化財センターの調査から—展」	平成21年12月19日～22年3月7日	1227名
特別展示期間中の入館者数合計		8573名

報告会・講演会参加者

事 業 名	実 施 日	参加人数
(財)北海道埋蔵文化財センター平成20年度発掘調査報告会	平成21年 4月11日	83名
秋季講演会「動物の考古学—イノシシ・ブタ・イヌ」	平成21年10月 3日	42名
冬季講演会「正倉院宝物の曝涼」	平成21年12月19日	121名

考古学教室参加者

事 業 名	実 施 日	参加人数
ガラス玉づくり 1	平成21年 6月20日	15名
ガラス玉づくり 2	平成21年 6月27日	13名
竪穴住居模型づくり	平成21年 9月 5日	15名
石器づくり	平成21年11月28日	15名
考古学入門講座	平成21年12月12日	17名
拓本講座	平成22年 3月13日	13名
こども考古学教室 夏休み親子考古学教室 第1回	平成21年 7月25日	23名
こども考古学教室 夏休み親子考古学教室 第2回	平成21年 8月 1日	51名
こども考古学教室 冬休み親子考古学教室 第1回	平成22年 1月 9日	23名
こども考古学教室 冬休み親子考古学教室 第2回	平成22年 1月16日	21名

考古学教室出前講座

事 業 名	実 施 日	参加人数
考古学教室出前講座 1 (釧路町)	平成21年 7月 4日	48名
考古学教室出前講座 2 (中富良野町)	平成21年 8月 8日	38名
考古学教室出前講座 3 (長万部町)	平成21年 8月22日	32名
考古学教室出前講座 4 (小平町)	平成21年 8月29日	15名
考古学教室出前講座 5 (羽幌町)	平成21年 9月 6日	28名
考古学教室出前講座 6 (雨竜町)	平成21年 9月12日	37名
考古学教室出前講座 7 (喜茂別町)	平成22年 2月27日	26名

考古学教室出前講座 (依頼分)

依 頼 先 ・ 実 施 場 所	実 施 日	参加人数
北広島市立東部中学校	平成21年 5月19日	52名
北広島市立広葉小学校	平成21年 6月 5日	45名
北広島市立大曲小学校	平成21年 6月18日	51名
北広島中央公民館	平成21年 6月28日	100名
江別市立江別第二小学校	平成21年 7月21日	124名
当別町立当別小学校	平成21年12月 5日	23名
当別町立当別小学校	平成22年 2月19日	35名
北広島市立広葉中学校	平成22年 3月18日	75名

(2) 団体利用者対応

小・中学校や大学、その他の団体を対象に勾玉づくり等の体験学習を13件、大学を対象に学外授業を5回行った（*印）ほか、各大学の学外授業の場として利用されている。また、教育局の研修を1件行った。

[小学校]

平成21年 5月14日（木）	札幌市立北陽小学校勾玉づくり体験学習	55名
6月12日（金）	岩見沢市立幌向小学校勾玉づくり体験学習	63名
6月17日（水）	三笠市合同小学校勾玉づくり体験学習	28名
7月1日（水）	江別市立上江別小学校施設見学	175名
7月16日（木）	札幌市立前田中央小学校施設見学	99名
12月9日（水）	南幌町立みどり野小学校勾玉づくり体験学習	40名
平成22年 2月10日（水）	江別市立江別太小学校勾玉づくり体験学習	101名
2月18日（木）	江別市立文京台小学校勾玉づくり体験学習	24名

[中学校]

平成21年 7月30日（木）	札幌日本大学中学校勾玉づくり体験学習	27名
9月29日（火）	札幌市立平岸中学校分教室澄川相談指導学級勾玉づくり体験学習	8名
10月26日（月）	江別市立第一中学校勾玉づくり体験学習	18名

[大学]

平成21年 5月29日（水）	札幌学院大学鶴丸講座学外授業	122名
7月11日（土）	北翔大学菊地講座学外授業*	16名
9月5日（土）	鶴見大学施設見学	35名
10月6日（火）	札幌学院大学臼杵講座学外授業	35名
10月21日（水）	北翔大学渡部講座学外授業	17名
10月28日（水）	北翔大学渡部講座学外授業*	19名
11月7日（土）	札幌大学博物館学外授業*	14名
11月21日（土）	北翔大学菊地講座学外授業*	68名
12月1日（日）	北海学園大学宮講座学外授業	12名
12月13日（日）	北翔大学菊地講座学外授業*	37名

[教育機関等の団体]

平成21年 5月29日（金）	石狩教育局平成21年度初任者研修校外研修「地域研修」	15名
5月31日（日）	北海道文化財保護協会施設見学	47名
7月7日（火）	大阪府立弥生文化博物館施設見学	20名
8月6日（木）	ウリ文化財研究所施設見学	3名
11月14日（土）	置戸町郷土資料館施設見学	17名
11月28日（土）	北広島市民大学施設見学	17名
平成22年 3月20日（土）	富良野市郷土研究会施設見学	33名

[その他の団体]

平成21年 5月9日（土）	末日聖徒イエスキリスト教会扶助協会施設見学	4名
5月9日（土）	森の子児童センター施設見学	14名
5月23日（土）	北広島市時習学園施設見学	29名

5月29日(金)	野幌地区女性団体協議会施設見学	25名
6月6日(土)	森の子児童センター施設見学	15名
6月28日(日)	大麻沢町自治会施設見学	57名
6月28日(日)	野幌教会こひつじ児童会勾玉づくり体験学習	32名
7月9日(木)	遠軽町ジオパーク推進課施設見学	34名
7月12日(日)	手稲一万歩歩く会施設見学	98名
7月23日(木)	森の子児童センター施設見学	16名
7月28日(火)	札幌市子ども会育成連合会中央事務局勾玉づくり体験学習	22名
7月29日(水)	カトリック小野幌教会サマースクール勾玉づくり体験学習	32名
7月30日(木)	トライ☆アス☆カル2009「サマーアートキャンプ I N 江別」施設使用	45名
8月5日(水)	見晴町シルバークラブ施設見学	33名
8月11日(火)	勤医協在宅デイサービスセンター花さか荘施設見学	16名
8月21日(金)	勤医協在宅デイサービスセンター花さか荘施設見学	8名
8月29日(土)	南幌町あそびの達人教室勾玉づくり体験学習	19名
9月24日(木)	みんなの家Ⅱ施設見学	11名
10月7日(水)	噴火湾考古学研究会施設見学	20名
10月10日(土)	縄文芸術を世界に発信する集い施設見学	28名
10月15日(木)	長沼町老人クラブ連合会施設見学	28名
10月15日(木)	洞爺湖町いきいき学園施設見学	23名
10月21日(水)	道新文化センター青木由直講座「身近な都市秘境を歩いてみよう！」施設見学	13名
10月23日(金)	大麻ベストフレンズ施設見学	15名
10月23日(金)	森の子児童センター施設見学	12名
11月3日(火)	ボーイスカウト札幌第24団施設見学	10名
11月17日(火)	レインボー教会施設見学	21名
11月25日(水)	デイサービスセンターここね施設見学	14名
平成22年1月14日(木)	札幌市厚別区連合女性部施設見学	20名
1月30日(土)	第1回文化財写真セミナーin北海道施設利用	30名
2月20日(土)	北海道旧石器文化研究会施設利用	21名
3月20日(土)	遠軽町ジオパーク推進課施設見学	15名
	計	1945名

(3) 博物館実習・現場実習等

高等養護学校の現場実習を2件、大学の図書館情報学課程図書館等見学実習を1件、学芸員課程博物館実習を2件行った。

[高校]

平成21年10月5日～23日	札幌高等養護学校現場実習	1名
平成22年1月25日～2月10日(土・日を除く)	北海道白樺高等養護学校現場実習	1名

[大学]

平成21年7月23～26日	札幌大学学芸員課程博物館実習	1名
平成21年8月4日	藤女子大学図書館情報学課程図書館等見学実習	3名
平成22年1月5～16日(10・11日を除く)	北海道教育大学岩見沢分校学芸員課程博物館実習	1名
	計	7名

(4) 購入図書一覧

	品名	編著者名	出版者
1	アジアの在来家畜 家畜の起源と系統史	在来家畜研究会	名古屋大学出版会
2	稲作漁撈文明 長江文明から弥生文化へ	安田喜憲	雄山閣
3	イラストでみるはるか昔の鉄を追って 「鉄の歴史」探偵団がゆく	鈴木瑞穂	電気書院
4	海と非農業民 網野善彦の学問的軌跡をたどる	神奈川大学日本常民文化研究所	岩波書店
5	エミシ・エゾからアイヌへ (歴史文化ライブラリー273)	児島恭子	吉川弘文館
6	開拓使お雇いエドゥイン・ダン 札幌での仕事と生活	田辺安一	北海道出版企画センター
7	開拓使と北海道	榎本洋介	北海道出版企画センター
8	貨幣考古学序説	櫻木晋一	慶應義塾大学出版会
9	から船往来 日本を育てた ひと・ふね・まち・ここ	東アジア地域間交流研究会	中国書店
10	環境変化と縄文社会の幕開け 氷河時代の終焉と日本列島	藤山龍造	雄山閣
11	木の文化と科学	伊東隆夫	海青社
12	境界の考古学 対馬を掘ればアジアが見える	依寛司	風響社
13	魚食文化の系譜	松浦勉ほか	雄山閣
14	近世陶磁器の考古学 出土遺物からみた生産と消費 (椋山女学園大学研究叢書35)	森本伊知郎	雄山閣
15	くらしと食事 (体験しよう!縄文人のくらし2)	本山浩子	汐文社
16	考古学と古代史のあいだ	白石太郎	筑摩書房
17	考古資料の修復・複製・保存処理	宮内庁書陵部陵墓課	学生社
18	古建築辞典	武井豊治	理工学社
19	古代日本海の漁撈民 (ものが語る歴史17)	内田律雄	同成社
20	しきたりと服装 (体験しよう!縄文人のくらし3)	本山浩子	汐文社
21	集落の変遷と地域性 (シリーズ縄文集落の多様性1)	鈴木克彦、鈴木保彦	雄山閣
22	出土鉄製品の保存と対応 (考古学調査ハンドブック3)	松井敏也	同成社
23	縄文大使カックウとショウタのふしぎな冒険	川嶋康男	くもん出版
24	新日本人の起源 神話からDNA科学へ	崎谷 満	勉誠出版
25	水洗トイレは古代にもあった トイレ考古学入門	黒崎 直	吉川弘文館
26	図解染織技術事典	田中清香、土肥悦子	理工学社
27	すまいと生活すまいと生活 (体験しよう!縄文人のくらし1)	本山浩子	汐文社
28	石器づくりの考古学 実験考古学と縄文時代のはじまり (ものが語る歴史18)	長井謙治	同成社
29	先学に学ぶ日本考古学	坂詰秀一	雄山閣
30	戦争遺跡 (日本の遺跡と遺産7)	矢野慎一	岩崎書店

	品名	編著者名	出版者
31	対論文明の風土を問う 泥の文明・稲作漁撈文明が地球を救う	安田喜憲ほか	麗澤大学出版会
32	誰も書かなかった古代史の謎	武光誠	中経出版
33	中世奥羽のムラとマチ 考古学が描く列島史	飯村 均	東京大学出版会
34	鉄と銅の生産の歴史 古代から近世初頭にいたる	佐々木稔、赤沼英男	雄山閣
35	動物と中世 獲る・使う・食らう (考古学と中世史研究 第6巻)	五味文彦ほか	高志書院
36	土偶王国 いわてドグウ★ガイドブック キュートな土偶たちの魅力が満載!!	さかいひろこ、米山みどり	ツーワンライフ出版
37	鳥の骨探 ダチョウ・ペンギン・アホウドリ・ツル・タカ・ペリカンからフクロウ・カクウ・カワセミ・スズメに至る日本産および外国産主要鳥類の全身骨格標本と頭骨・胸骨・翼の骨・足の骨等の分解骨カラー写真から	松岡広繁ほか	エヌ・ティー・エス
38	日本食物史	江原絢子ほか	吉川弘文館
39	日本の中世墓	狭川真一	高志書院
40	日本列島の三つの文化 北の文化・中の文化・南の文化 (市民の考古学7)	藤本強	同成社
41	農耕の起源を探る イネの来た道	宮本一夫	吉川弘文館
42	墓から探る社会	川崎市市民ミュージアム	雄山閣
43	発掘された日本列島2009 新発見考古速報	文化庁	朝日新聞社
44	東アジア先史学・考古学論究 (考古民俗叢書)	甲元真之	慶友社
45	文化遺産と現代	土生田純之	同成社
46	文学のなかの考古学 (佛教大学鷹陵文化叢書19)	門田誠一	仏教大学通信教育部
47	文化としての縄文土器型式	川崎 保	雄山閣
48	北海道アイヌの人類経営学序説 魂の響き 身体の響き	大場四千男	北海道出版企画センター
49	北海道の宗教と信仰	佐々木馨	山川出版社
50	ホネホネたんけんたい	西沢真樹子ほか	アリス館
51	ホネホネどうぶつえん	西沢真樹子ほか	アリス館
52	埋蔵文化財調査の基礎テクニック (考古調査ハンドブック1)	戸田哲也	ニュー・サイエンス社
53	見える歴史 NHK教育テレビ 第1巻	NHK 『見える歴史』取材班	中経出版
54	湖と山をめぐる考古学	用田政晴	サンライズ出版
55	紫 (むらさき) 紫草から貝紫まで (ものと人間の文化史148)	竹内淳子	法政大学出版局
56	目からウロコの縄文文化 日本文化の基層を探る 縄文時代のイメージが変わる!	渡辺 誠	ブックショップマイタウン
57	木綿再生 (ものと人間の文化史147)	福井貞子	法政大学出版局
58	野生動物調査痕跡学図鑑	門崎允昭	北海道出版企画センター
59	弥生農耕のはじまりとその年代 (新弥生時代のはじまり 第4巻)	西本豊弘	雄山閣
60	ようこそアイヌ史の世界へ アイヌ史の夢を追う	平山裕人	北海道出版企画センター

(5) 刊行物受領先一覧(*国等の機関以外の掲載順は、基本的に所在地の市町村コード順とした。)

[国等の機関]

1 文化庁

[北海道]

- 2 網走市立郷土博物館
- 3 美幌博物館
- 4 上士幌町ひがし大雪博物館
- 5 浦幌町立博物館
- 6 広尾町教育委員会
- 7 青木由直
- 8 札幌市埋蔵文化財センター
- 9 (財)北海道文学館
- 10 北海道開拓記念館
- 11 北海道生涯学習協会
- 12 北海道大学総合博物館
- 13 北海道立アイヌ民族文化研究センター
- 14 北海道立文書館
- 15 恵庭市郷土資料館
- 16 函館市教育委員会

[東北]

- 17 東北大学大学院文学研究科
- 18 東北歴史博物館
- 19 秋田県立博物館
- 20 男鹿地域研究会

[関東]

- 21 足利市教育委員会
- 22 所沢市立埋蔵文化財センター
- 23 駿台史学会
- 24 朝日新聞出版
- 25 (株)文化環境研究所
- 26 港区教育委員会
- 27 カズ企画
- 28 大成エンジニアリング株式会社
- 29 岩崎書店
- 30 (株)新泉社
- 31 (株)吉川弘文館
- 32 大田区教育委員会
- 33 中央大学通信教育部
- 34 国際基督教大学博物館 湯浅八郎記念館
- 35 神奈川県教育委員会
- 36 (財)かながわ考古学財団
- 37 横浜市歴史博物館

[北陸]

- 38 新潟市埋蔵文化財センター
- 39 敬和学園大学人文社会科学研究所
- 40 富山県埋蔵文化財センター
- 41 野々市町教育委員会
- 42 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
- 43 若狭三方縄文博物館

[中部]

- 44 山梨県埋蔵文化財センター
- 45 南アルプス市教育委員会
- 46 北杜市埋蔵文化財センター
- 47 長野市教育委員会
文化財課埋蔵文化財センター
- 48 岐阜県文化財保護センター
- 49 磐田市教育委員会
- 50 一宮市博物館
- 51 安城市教育委員会

[近畿]

- 52 滋賀県教育委員会
- 53 滋賀県埋蔵文化財センター
- 54 (財)栗東市文化体育振興事業団
- 55 京都府教育委員会
- 56 岸和田市教育委員会
- 57 大阪狭山市教育委員会
- 58 姫路市教育委員会
- 59 たつの市立埋蔵文化財センター
- 60 多可町教育委員会

[中国]

- 61 鳥取県埋蔵文化財センター
- 62 倉吉市教育委員会
- 63 鳥根県埋蔵文化財調査センター
- 64 鳥根県古代文化センター
- 65 鳥根大学ミュージアム
- 66 総社市教育委員会
- 67 (財)広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
- 68 広島県教育委員会
- 69 広島県立歴史博物館

[四国]

- 70 香川県立ミュージアム
- 71 香川県埋蔵文化財センター
- 72 高知県教育委員会

[九州]

- 73 北九州市立自然史・歴史博物館
- 74 九州大学大学院
人文科学研究院考古学研究室
- 75 熊本県立装飾古墳館分館
歴史公園鞠智城・温故創生館
- 76 熊本県文化財資料室
- 77 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 78 南種子町教育委員会 社会教育課
- 79 喜界町教育委員会

[沖縄]

- 80 沖縄県立埋蔵文化財センター

8 講演会要旨

(1) 秋季講演会

「動物の考古学—イノシシ・ブタ・イヌ」 講師：西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館教授）

はじめに

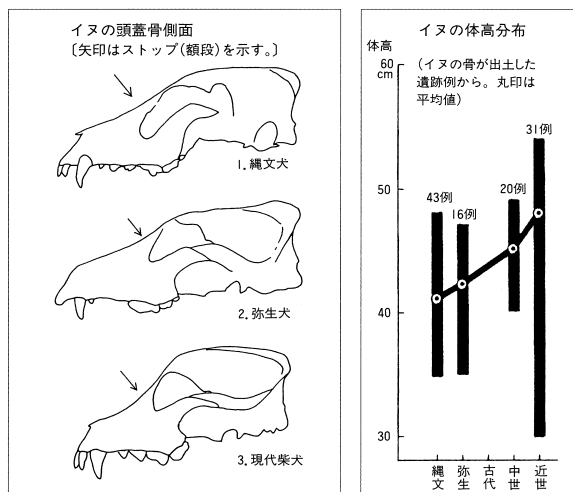
本日は、北海道の遺跡から出土するイノシシ・ブタ・イヌについてお話しします。しかし、北海道の資料だけでは不足する部分があるため、前半部は、「どのようなブタやイヌが飼われていた？」という問題について、日本列島全体の事例を紹介し、後半部は、北海道の状況について説明していきます。一部、DNAの問題についても補足しています。

1. 日本におけるイノシシ・ブタ・イヌ

縄文時代の陸獣狩猟の割合 旧石器時代の様子は、まだよくわからないため、この講演でも縄文時代以降の資料についてお話ししていきます。私は、20年ほど前全国の縄文時代遺跡のうち動物遺体が出土した45の遺跡について分析を行いました。その結果、縄文時代では、シカ(39.3%)とイノシシ(37.7%)を合わせて、全体の3/4ほど出土していることがわかりました。その他が小型獣で、意外と多いのがムササビでした。現代の皆さんは、なかなか見る機会も少ないと思いますが、縄文人はかなりの数を狩猟していることがわかります。ムササビは捕獲しやすい動物です。昼間のうちに巣穴をみつけておけば、夜になるとそこから出てきたところを捕まえるので、うまくいく確率が高いのです。現在では、神社などに巣をつくっていることが多いようです。東日本はシカが、西日本はイノシシが多い傾向があります。

イノシシ・シカの分布 イノシシがいつの時代からいるかという問題は、まだ結論が出ていません。北海道には野生のイノシシは自然分布しておらず、紀元前15000年前頃、日本列島を北上してきて、青森まで分布するようになります。その時期には、津軽海峡ができていたので、イノシシが北海道まで渡れなかったと考えられています。シカのうち、ニホンジカについては、かなり古くから日本列島に生息していたと考えられていますが、いつ北海道に渡ってきたかについては、よくわかっていません。おそらく、イノシシよりも前、紀元前15000年より以前、津軽海峡がまだ陸橋としてつながっていた時期に渡ったものといえます。エゾシカは、ニホンジカの亜種で、現在日本列島に分布するニホンジカは、エゾシカに比べ小さいのですが、日本列島全体の縄文時代遺跡から出土するシカは、今のエゾシカくらいの大きさがあります。ただし、時期により差はみられるようです。

イヌの形態分類 動物考古学は、動物の分類を行うのと同時に骨の形態差をみています。イヌの分類は、頭骨の形と下顎の第一後臼歯をみるとわかります。ここでは、頭の形についてどこを基準にみているかを説明します。上顎であれば第4前臼歯。この歯は、裂肉歯といい、ものをかみ切る歯です。この歯の形態をみて、私たちは食肉目のイヌなのか、ネコなのかを分類していきます。イヌの中で特徴的なのは、鼻面の部分で、時代の新しいイヌは、その部分がへこんでいます。人間は、イヌの改良も行ってきたので、コリーやシェットランドシープドッグなどの例外的なイヌもありますが、それらを除いた柴犬やアイヌ犬などは、鼻面の根本がくぼんでいることが家畜化の証拠です。この部分をストップといいます。その他にみている部分は、①後頭部が大きいのか、小さいか、②頭頂部が高いか、低いのか、③上面観でみたときに、頬骨がはりだしているかどうか、をみています。柴犬やハスキー犬は、正面から見ると頬骨が張り出ています。図版1は、上が縄文犬、中段が弥生犬、下段が現代の柴犬となります。

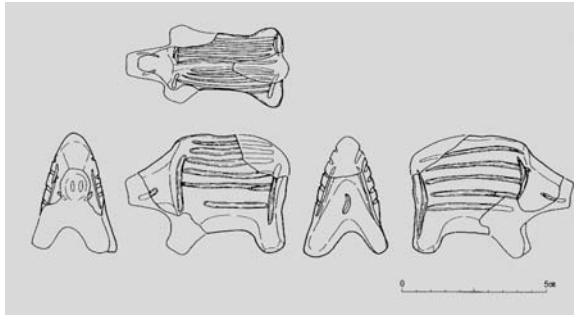


図版1 イヌの頭蓋骨側面 (左)・体高分布 (右)

縄文犬は、後頭部が小さいのが特徴。弥生犬は、明瞭にストップがへこんでいるのがわかります。図版2は、愛知県朝日貝塚出土資料で、このような形態の犬は、ヨーロッパから中国にかけて、世界全体で新石器時代になると出てきます。この形態が一番近いものは、中国では殷、漢代のイヌです。その後、江戸時代のイヌも基本的には弥生時代のイヌと変わらないのですが全体が大きくなっています。図版1右が、日本の縄文



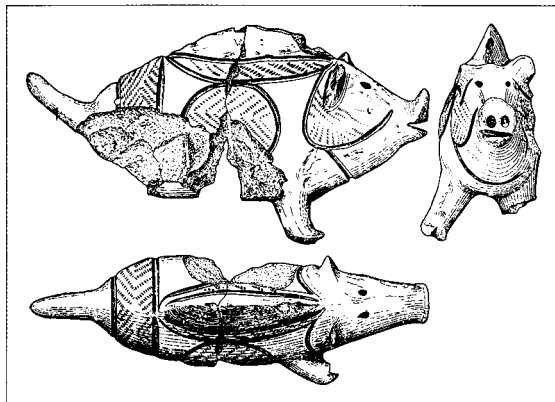
図版2 愛知県朝日貝塚出土イヌ頭蓋骨側面



図版3 函館市日ノ浜遺跡出土の動物形土製品



図版4 千葉県能満上小遺跡出土イノシシ形土製品



図版5 青森県弘前市十腰内遺跡出土イノシシ形土製品

時代から近世までのイヌの体高分別図です。

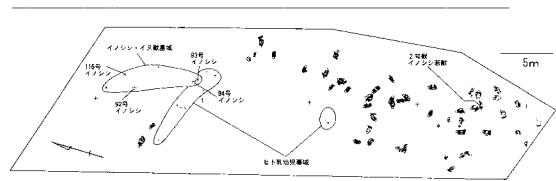
動物形土製品 図版3は、縄文時代晩期、函館市日ノ浜遺跡出土の動物形土製品。うり坊に似せて造られたもの。図版4は縄文時代晩期、千葉県能満上小遺跡出土イノシシ形土製品。図版5は、縄文時代後期、青森県弘前市十腰内遺跡出土イノシシ形土製品。

縄文時代は、野生のイノシシを利用していました。土製品を造っていることから、これらの土製品は、ブタを模しているものではないかと考えています。縄文時代のブタ飼育を主張しているのは私だけで、他の研究者は、否定しています。

私がブタ飼育を主張する理由としては、①イノシシ形土製品は日本全体で現在までに100例以上出土していること、②縄文時代中期後半から晩期に時期が限定されていること、③続縄文時代になるとなくなってしまうこと、④弥生時代にもなく、シカ、イノシシは両方とも縄文時代に捕獲されていることがあげられます。

シカ形土製品は、出土しておらず、可能性を指摘する人でも1、2例くらいあるかどうかで、本当にシカかどうかはわかりません。縄文時代は、シカとイノシシを両方獲っているにもかかわらず、土製品をつくるのは、イノシシだけといえそうです。

人骨と一緒に埋葬されるイノシシ骨 縄文中期の千葉県茂原市下太田貝塚では、人骨とともに生後1年のイノシシ骨が埋葬されていました(図版6)。このように縄文時代中期以降になると、人間のこどもとイノシシの子ども、イヌの子どもが同じ墓域のなかに埋葬される例が出てきます。



図版6 千葉県下太田貝塚出土ヒト・イヌ・イノシシの墓位置図

伊豆七島から出土したイノシシ骨 また、伊豆七島でもイノシシがみつかっています。伊豆の大島には、イノシシが伊豆半島から泳いで渡ったという人もいないわけではないのですが、八丈島まではいくらなんでもイノシシが自力で泳いで渡ったと考えることは難しいでしょう。元々伊豆七島にイノシシがいたという説もありますが、火山島なので元々いたというのは考えにくい。また、伊豆七島でみつかるといえるイノシシは小型であるのも特徴としてあげられます。

こどもを連れて行って飼育していたという問題は、

のちほどお話しする北海道の問題とも関連します。

伊豆にある倉輪遺跡（縄文時代前期）から出土するイノシシの骨は変形していて、ニホンイノシシとリュウキュウイノシシの間ぐらいの大きさで、頭の長さが短くなっています。人間が連れて行って利用し、その一部がエスケープして野生化したという考え方もあります。野生のイノシシを丸木舟にのせて連れて行くということは、危険きわまりなく、家畜化したブタを連れていったものと考えるのが自然ではないかと私は考えています。

近年、骨の中に家畜化の状況が読み取れる資料も増えてきています。

家畜化現象の特徴 家畜化現象の特徴としては、①骨が肥大化し、骨がスカスカになって、骨粗鬆症のようになっている場合。早く育成し、現代のブタは、生後7ヶ月くらいで体重が100から200kgくらいになるため、こどものはずなのに、体は大人の状態になってしまう。そのため、骨の発達が追いつかず、スカスカになるのです。

②短頭化現象。縄文時代の出土骨にもそのような特徴のものがみつかります。縄文時代に家畜化をこころみ地域があったのではないかと。全国的にブタをつくったのではなくて、ときどきブタをつくってはやめという繰り返しがあったと考えられます。

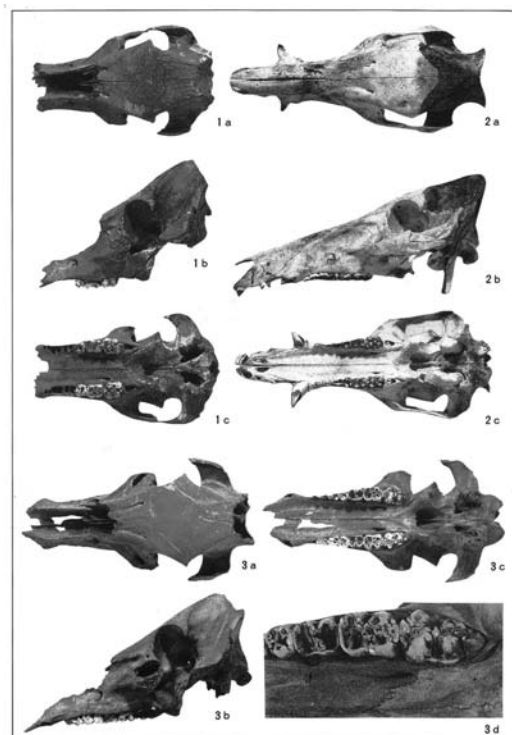
イヌの埋葬問題 縄文時代のイヌは、埋葬されています。そのためかく乱などで一部失われる場合もありますが、土坑の中に全身の骨格がまとまって出土することが多いのです。縄文犬を100体くらいみてきましたが、そのなかの1割は怪我をしており、肋骨が折れて治っているケースが多数みられました。

老犬で、腕がおれて3本脚で歩いた例もみられます。折れた腕の肘部分にカリエスができていますので、腫みをもって非常に痛かったはず。そのような状態のイヌも飼育していました。狩猟用に飼育していたイヌに対しては、怪我をしても天寿をまっとうするまで、飼育し続けた様子が見えます。

弥生時代になると、埋葬例は0になります。唯一壺のなかに入った状態で出土したものを埋葬例であると主張する人がいます。

イヌがきちんと埋葬されるのは、縄文時代と江戸時代で、弥生時代から江戸時代までの間は、イヌが食用となります。イヌを食べるということは、稲作農耕にはよくあることです。私は、弥生イヌと一緒に弥生ブタが入ってきたと考えていますが、これについてもブタは入ってこなかったと考えられるひともいます。

ブタの歯槽膿漏 弥生時代のブタには、歯槽膿漏がたくさん出ているのに対して、縄文時代のイノシシには、



図版7 下郡桑苗遺跡のブタと現生イノシシ

1・3、下郡桑苗遺跡出土のブタ〔1、雄の若獣（No.2）〕3、雌の成獣〔No.1〕2、ブタと比較するために示した現生イノシシの雄・若獣 3dは、歯槽膿漏の部分を拡大（矢印）

歯槽膿漏がほとんどみられません。

縄文時代のイノシシには10歳以上の老獣で、歯がものすごくすり減っているものもあります。

弥生時代のブタになると、7、8歳の健全なメスでも、第1後臼歯の内側に歯槽膿漏がみられます。このような例は、ヨーロッパローマ時代、それ以降中世のブタにも特徴的にみられます。

同じ年齢の同じ性のものを比較することができるように、全身は数十、頭骨は100体、年齢は生後15日から15、16歳くらいまでの標本を持っています。

また、イノシシを飼育してもらって、その第3世代、第4世代の標本も2、30体ほど持っています。

大人のイノシシは、歯列面をまっすぐにしたとき、頭高が高くなります。

弥生ブタは大きさが3つのグループに分けられます。一番大きいのは吉野ヶ里で出ているグループ。その当時の野生イノシシよりはるかに大きい。愛知県朝日貝塚から出土しているのは小さいブタ。口が小さくて、おちょぼ口のブタと私は呼んでいます。

中国の南部揚子江流域河姆渡のブタと弥生のブタは大変よく似ています。中国でも殷代のブタは南のブタで、仰韶文化のブタとは形態が違うようです。

弥生時代にはいったブタは、古代まで飼育されていました。飼育を担当していたのは、猪飼部で、「猪」の漢字は、ニホンではイノシシを著していますが、中

国ではブタを意味しています。十干十二支のイノシシ年は、中国ではブタ年になります。犬飼という名前も、イヌを飼うところからきており、馬飼部や、牛飼部なども同じような由来の名前です。

聖武天皇の頃、「肉を食べるな、飼育するな」という禁令が出されます。聖武天皇の時代には、「ブタは野にはなって、生をとげさせろ」、というような命令が何度か出されて、飼育していたブタを解放するようになります。

江戸時代には体躯の大きいブタと小さいブタがあり、大きいブタは黒豚になります。

文献では、寛政七年（1795）の橘南溪『東西遊記』に広島町ではブタが多いことを「京などにイヌのあるごとく家々町々の軒下に多し。形牛の小さきがごとく、肥えふくれて色黒く、毛はげてふつつかなるものなり」と描写しています。

2. 北海道におけるイノシシの分布

私はまだ北海道にいた時分にイノシシ遺体の出土分布図を作成しました。現在は遺跡数が増えています、分布の傾向と変わらないようです。

北の方は、礼文島船泊遺跡からイノシシの犬歯が装身具としてみつかっています。遺体の多くは、洞爺湖町入江貝塚、千歳市美々4遺跡、千歳市ママチ遺跡など、道南部から道東部にかけたの縄文時代後期から晩期にかけて出土しています。幼老、雌雄にかかわらずみられます。大きさもニホンイノシシとほとんど変わりません。

おそらく北海道には、生きてまま連れてきたようです。出土遺体は、頭、手足の部分を含め、全身の骨がみられます。イノシシの飼育化については、北海道の縄文人が青森まで行ってイノシシを飼育していたとは思えない。北海道の縄文人は、飼育されたイノシシを本州にでかけて行って受け取って戻ったのでしょう。

北海道の人には、日頃食べることのできないイノシシの肉が食べたいという欲求があったかもしれない証拠として、美々4遺跡のひとたちは、埋葬儀礼のなかに骨を焼いてまいています。細かい骨になってしましますが、爪の部分で種が同定できます。肉付の骨もかなり焼かないとからからはなりません。美々4遺跡の骨はかなり良く焼いていることがわかっています。

日ノ浜遺跡出土のウリ坊に似せた動物形土製品は、飼育の過程を表したもの。イノシシ形土製品は、生きているイノシシの代用品で儀礼に使用するものと考えられます。

擦文・オホーツクの出土例は、道東北に多い傾向があります。

オホーツク文化のブタは、野生イノシシが北海道にもいたのではなく、北海道のオホーツク文化人が、サハリンや大陸にいて礼文島や利尻島にブタをつれて

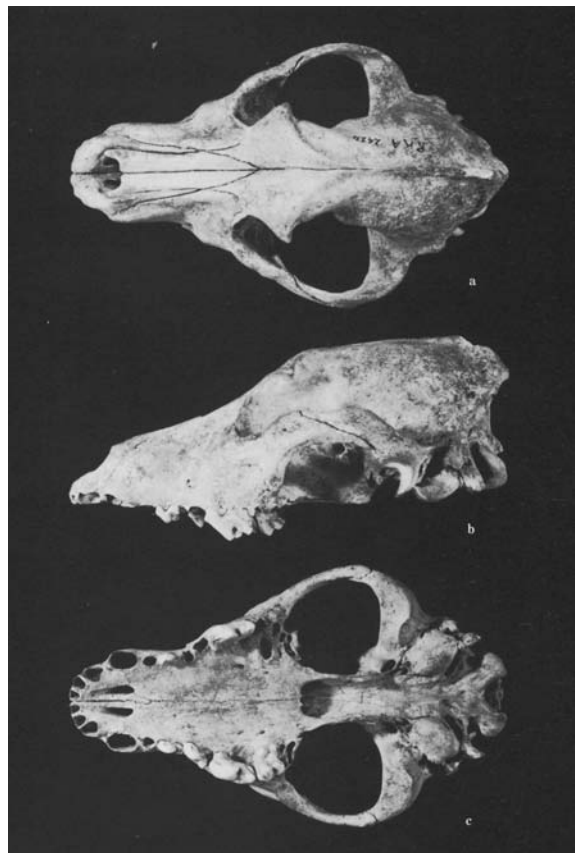
きたと考えられます。

野生イノシシの場合、後頭部と吻部の長さが1：1位なのに対して、後頭部の広いところが中間くらいに來ます。

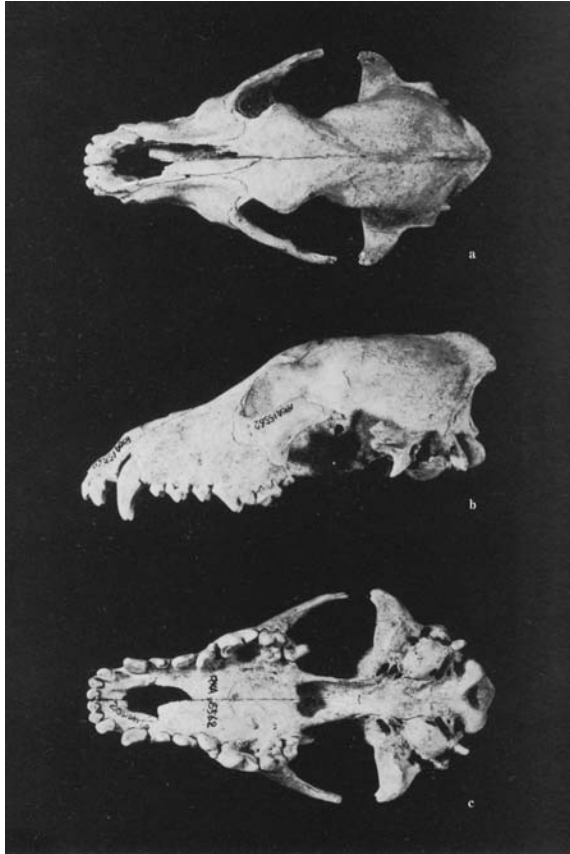
オホーツク文化のイノシシは、ストップはあまり変化がなく、平坦であるのに対して、後頭部の広い部分が後ろのほうにあります。後頭部の上面観が角張らずに、丸みを持ち、吻部が細くなっています。

オホーツク文化は時代もなかなか決定されませんが、紀元後数世紀から10世紀前後頃、大陸からの渡來人が入ってきて、海獣狩猟とともにブタを飼育していました。

北海道のイヌの問題 北海道にどのようなイヌがいるかは問題となります。縄文時代のイヌは、下顎は出土しますが、上顎があまり出土していません。小型犬で丈夫なイヌが縄文犬の特徴で、伊達市の北黄金貝塚で出土したイヌは、頭が余り変化がなく、縄文犬的な要素と弥生犬的な要素の両方が見受けられます。中世の上ノ国町勝山館跡で出土したものは、ストップがはっきり変化あり、高くなっています。頬骨が丸みをもち、膨らんでおり、現在の柴犬のような特徴がみられます。



図版8 礼文島香深井1遺跡出土
オホーツクAタイプ イヌ



図版9 礼文島香深井1遺跡出土
オホーツクBタイプ イヌ

オホーツク文化期の礼文島香深井1遺跡から出土したオホーツクAタイプとしたイヌ(図版8)は、鼻面の部分が短く、口の幅が広い。頬骨が後ろにむかっぐつとはりだす傾向があります。現代のイヌと比較すると、樺太犬、エスキモー犬に似ています。口の部分が幅広く、頑丈なのは特徴的です。

次は、オホーツク文化のBタイプ(図版9)。口の部分が全体に華奢になり、後頭部もAタイプに比べると小さめです。顔の長さが長くなり、頭高が低くなります。

中世勝山館跡出土のイヌは、現代のアイヌ犬とも近いし、骨太の点は、オホーツク犬にも近い。オホーツク犬と縄文時代から続くイヌと弥生時代のイヌがすべて混血した可能性があると考えられます。

DNAの分析 DNAを調査するとなんでもわかるかという、なかなかそうではありません。

例えば、私が弥生ブタを主張したときに、名古屋大学の小沢先生が弥生ブタ説を否定しようとDNA分析を行いました。DNA分析のために、私が弥生ブタを考えている資料を小沢先生にお渡しして実施されたものですが、その結果は東南アジアで最初にイノシシがブタになったというグループとは違い、むしろ、現代

の野生イノシシに近いということで、私の説を否定されました。それを受けて、私の弥生ブタ説はむづかしいと発表される方もいらっしゃいます。

小沢先生のイノシシのグルーピングには無理があり、それにより結果が悪い可能性があるとは私は考えています。小沢先生は、ミトコンドリアDNAの20くらいの塩基配列をみて、その中の7か所で結論を出しています。その後、帯広畜産大学の石黒先生がDNA分析を行い、ニホンイノシシや東南アジアのイノシシなどいくつかのイノシシと比較分析を行い、石黒先生は600の塩基配列をみて結論を出しています。7か所と600か所では精度が違ってくると思います。この結果では、弥生ブタは東南アジア系のブタと同じグループになっています。

現在、考古学で利用しているDNAは、ミトコンドリアDNAといい、細胞のなかの核DNAではない。細胞の外にある細胞質にあるDNAを調べています。核は父系と母系とがわかるDNA。細胞質は母系のみたどることができるDNA。ミトコンドリアDNAで母系遺伝のもの。さらに細胞質は、運動系をつかさどるDNA。運動機能の違いをみているにすぎず、形態とは一致しません。家畜化現象をたどることはできない。種や種をたどることもむづかしい。DNAで家畜化現象を解決することは実は非常に難しい問題なのです。

弥生ブタの特徴をもつ続縄文のイノシシをみたことがないため、縄文的なイノシシ飼育が続縄文時代にあったかは、これからの課題となります。縄文時代晩期から続縄文にかけて、クマの土製品、石製品が多くつくられるようになりますので、イノシシからクマへの転換がみられるのかもしれませんが。

図版出典

- 図版1 国立歴史民俗博物館編 1996『動物とのつきあい：食用から愛玩まで』展示図録 国立歴史民俗博物館
- 図版2 愛知県埋蔵文化財センター編 1994『朝日遺跡。5』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書；第34集
- 図版3 佐藤智雄 1998『北海道の動植物を意匠とする製品』『東北民俗学研究』6
- 図版4 市原市文化財センター編 1995『市原市能満小貝塚』財団法人市原市文化財センター調査報告書；第55集 福山通運・武蔵屋商事、市原市文化財センター 巻頭図版
- 図版5 村越潔 2003『青森県における縄文の絵画と塑像』『考古学ジャーナル』497 ニューサイエンス社 所収磯貝正彦実測図
- 図版6 西本豊弘 2003『縄文時代のブタ飼育について』『国立歴史民俗博物館研究報告』108 (〔国立歴史民俗博物館〕開館二〇周年記念論文集) 図1
- 図版7 西本豊弘 1991『弥生時代のブタについて』『国立歴史民俗博物館研究報告』36
- 図版8・9 大場利夫、大井晴男編 1981『香深井遺跡』下巻東京大学出版会

(2) 冬季講演会

「正倉院宝物の曝涼」

はじめに

私の専門は保存科学ですが、元々考古学に興味がありました。35年ほど前に初めて雪の北海道を訪れ、キウス周堤墓群を遠くから見て、その周堤の高まりに感激したものでした。正倉院宝物のことに、北海道で本格的なお話しをするのは、今回がはじめてです。正倉院の仕事は、大きく正倉院宝物を守ること、個々の宝物について研究することの2者に分けられます。もちろん両者は密接に関係しており、宝物について研究を進めることは、宝物を守ることに関与するだけです。今回は宝物を守る仕事についてお話しします。表題にある「正倉院宝物の曝涼」は、その象徴の意味で用いています。

1. 正倉院・正倉院宝物について

正倉院の位置 平城京は平城宮を北の中心として東西に広がりますが、その北側の東寄りには外京という形で張り出し、さらに京外の東の外側に東大寺が位置します。正倉院宝物は聖武天皇や光明皇后ゆかりの品が東大寺に納められたことにはじまります。図版1上は、現在の正倉院の建物です。正倉院の構内で現存する奈良時代からの建物はこの1棟のみですが、奈良時代においては、周囲に何棟かほかにも倉庫があったようです。ただしこの正倉院の建物が一番立派であって、他は、掘立であったり、小さかったものと考えられます。平城京や平安京などの宮都、あるいは西大寺などの寺にも、それぞれ倉すなわち「正倉」が集中している区域という意味の「正倉院（正蔵院）」と呼ばれる一面がありました。これらの中で、建物としては現在までに東大寺の正倉院の1棟だけが生き残り、それが建物の固有名詞となりました。

正倉院は東大寺大仏殿の北方約300mのところがあり、現在その東側と西側には空調設備を備える新宝庫が立っています。また私が勤務する正倉院事務所も、構内のその近傍にあります。

正倉院正倉の構造 正倉院は北倉、中倉、南倉の3つの部分に分かれ、1棟3倉形式の構造です。それぞれの倉は1階、2階、屋根裏の3層からなり、また内部で完全に仕切られています。正倉院正倉については当時双倉という名で呼ばれていたこともあり、もともとは唐招提寺経蔵・宝蔵（図版1左下）のように近接して、独立に立っていた校倉2棟を後でつないで一つにしたのではないかという説。あるいは法隆寺鋼封蔵（図版1右下）のように、もともと二つの倉にひとつの屋根をかけ、それぞれの出入り口部が相対する構造で

講師：成瀬正和氏（宮内庁正倉院事務所保存課長）

あった建物の中間をふさぎ、ここも倉として機能するように改造したのではないかという説もありました。ただし建築学の専門家の間では、もともと現在ある形式であったと考える説が有力です。



現在の正倉院



唐招提寺経蔵・宝蔵



法隆寺鋼封蔵

図版1 正倉院と双倉

正倉院の現存する一番古い写真は、明治5年(1872)のもので（図版2左上）。軒先が波打っていることがわかんと思います。次に古い写真は、明治5年以降、大正2年(1914)の解体修理以前のもの（図版2右上）で、それ以外時期は不明です。軒先の垂下を押さえるため、屋根下に支柱を立てています。図版2左下は、大正2年の解体修理直前の写真と考えられます。また図版2右下は、大正2年の解体修理直後のもので、解体修理により軒先の垂下が修整され、支柱は取り除かれています。なお現在ある雨落溝は、解体修理以前には見あたりません。また建物の下には解体修理に伴いコンクリートが打たれるようになりました。このような古建築物は百年に一度メンテナンスを行うことが常法で、前回の修理から約百年経った今、再び修理の計画が立てられています。



明治5年



明治5年以降、大正2年以前



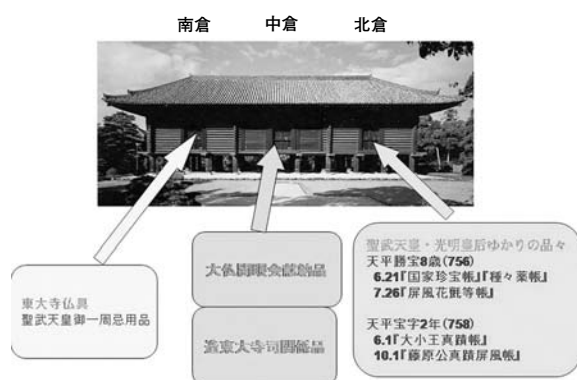
大正2年直前



大正2年以降

図版2 正倉院の変遷

正倉院宝物の由来 先にも述べましたが、正倉院宝物は、聖武天皇・光明皇后ゆかりの品々の献納が核になっています。献納は、(1)天平勝宝8歳(756)6月21日(献物帳「国家珍宝帳」)、(2)同日(献物帳「種々菓帳」)、(3)同年7月26日(献物帳「屏風花氈等帳」)、(4)天平宝字2年(758)6月1日(献物帳「大小王真蹟帳」)、(5)同年10月1日(献物帳「藤原公真蹟屏風帳」)、の計5回にわたり行われ、それぞれの献物帳が残されています。その中で宝物の数量が多かったのは、(1)の六百数十点、と(3)の百数十点で、これらの品々が核となり、その他に天平勝宝4年の大仏開眼会に献納された品々、造東大寺司(東大寺の建設や修理を司った役所)の関係品、東大寺の仏具などが加わり、現在の正倉院宝物が形成されました。東大寺の仏具には、聖武天皇の御一周忌の用具も含まれています。献物関係以外の品々がこの倉に入ることになった経緯は、明らかではありません。文献史料には、天暦4年(950)年、東大寺羅索院双倉の什物が正倉院南倉に移動されたことが記されていますが、このときに献物関係以外のすべての宝物が移されたというわけではなく、いろいろな経緯を経て宝物が正倉院正倉に納められるようになったと考えられます。図版3には各倉と由来による、そのおおよその収蔵品を示しました。



図版3 正倉各倉に納められた宝物の由来

なお正倉院の宝物はほとんどが8世紀の中頃のものです。

正倉院宝物の調査と研究 宝物は、約9千点あります。これは物品管理上の登録数であり、場合によっては1点としたものがいくつかのもの集合体である場合もあります。因みに、整理中の古裂などを1片1片数え上げるとそれだけで、20万点を超えることになります。

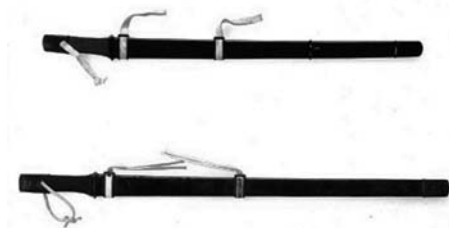
宝物の調査・研究の仕方にもいろいろな視点があり、由来に着目する方法、用途に着目する方法、製作技法に着目する方法、材質に着目する方法などがあります(図版4)。私は、材料からの接近に関心があり

ます。正倉院宝物は150種ほどの材料から成っています。そのうちの50種類は、無機材料で、これには石や石を砕いて作る顔料、金属やガラスなどがあります。つづいて植物材が50種ほどあります。木材が一番多く、その他では竹や植物の蔓を利用しているものもあります。また動物材は30種ほどで、毛皮、牙角、毛などを利用しています。その他としたものは20種ほどで、これは繊維素材や接着剤など、上記の材料を化学変化あるいは物理変化させつづけたものです。

由来	用途	製作技法	材質
聖武天皇関係 東大寺関係 造東大寺司関係 貴族等献納関係	調度・楽器・茶具・ 武器・武具・食器・ 香奩・書籍・仏具・ 儀式具・服飾具・ 遊戯具	金工・木工・竹工・ 漆工・染織・陶器・ ガラス・絵画・彫刻	無機材(金属・石・ 顔料) 植物材(木・竹・草 木・その他) 動物材(牙角・皮 革・獣毛・珉瑠・ 貝・真珠・骨) その他(繊維・紙・ 染料・塗料・接着 剤)

図版4 宝物の調査・研究の視点

これらの視点に基づく調査成果は日本史・美術工芸史・考古学・保存科学などあらゆる分野に役立ちます。道立埋蔵文化財センターに保管されている遺物は、土器や、石器などが多く、正倉院宝物は、これと別世界のものとお考えでしょうが、今日展示されている恵庭市西島松5遺跡の墓から出土した刀は、正倉院所蔵の刀(図版5)とまさに同類のもので、今後正倉院宝物の研究と道立センターの研究がリンクする機会もあると考えています。



図版5 黒作太刀(正倉院宝物)

2. 正倉院の曝涼・点検

正倉院の曝涼の変遷 正倉院におけるもっとも初期の曝涼は、延暦6年(787)6月26日のものであります。当初の曝涼は、6年に1回ほどの間隔であり、また「土用干し」と称し、6月や7月の暑い時期に行われていました。

その後、鎌倉～江戸時代の開封は、倉に修理の必要や盗難の被害などがあったときの不定期のもので、100年に1度、あるいは50年に1度という頻度の時もありました。

明治5年(1872)に新政府になってはじめての曝涼が行われます。また明治16年には、曝涼毎年1回の制

が立てられました。当初、曝涼の時期は古制に倣って、7～9月の暑い季節でしたが、かえって黴虫害の被害などを拡大するおそれもあり、明治28年（1895）からは10月からに変更されました。

昭和35年（1960）より前は、正倉の中で曝涼を行っていました。昭和35年に、宝物は正倉から新宝庫（東宝庫）に移されましたので、それからは点検を新宝庫で実施することになり、現在に至っています。

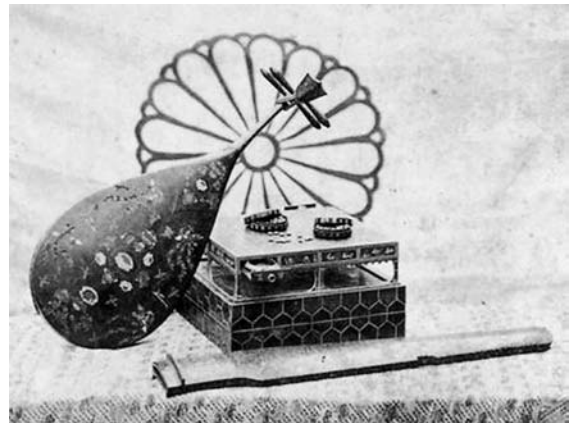
壬申検査 明治4年5月23日、太政官布告により、「古器物保存方」、すなわちわが国はじめての文化財保護法が発令されました。廃仏毀釈の嵐の中で、貴重な文化財の破壊や海外流失を防ぐためのものでした。明治5年5月27日～10月20日、この法律に基づき、関西圏の社寺およびそこが有する什宝が調査されました。調査はこの年の干支にちなんで、壬申検査と呼ばれています。メンバーは、町田久成（文部省）・蜷川式胤（文部省）・内田正雄（文部省）・世古延成（宮内省）・高橋由一（西洋画家）・横山松三郎（写真家）・岸光景（画師）・柏木政矩・笠倉鉄之介（博物学）などです。その中で正倉院宝物の調査は、8月12日～8月20日に行われ、壬申検査の中で一番時間がかけられています。

メンバーの中心人物・蜷川式胤は、宝物の現状記録として、多くの拓影図を残しました。この拓影図は現在、正倉院の仕事に大変役に立っています。またこの調査には写真家横山松三郎も参加しており、正倉院宝庫、正倉院宝物についても何枚かの写真が残されています。図版2左上の最も古い正倉の写真もこのときのものです。図版6左は、正倉を南東部から見上げて撮影したもの、図版6右は、正倉の最も南側の柱列を東側から撮したものです。図版7は、このとき撮影された宝物の写真です。当時は乾板写真であり、太陽光のもと、光量が必要量に達するまで、宝物は外に置かれていたわけです。現在の観点から言えば、紫外線等に長時間曝したことは問題ですが、写真が残っているおかげで、今どこが修繕され、どこが破損していたかなどの情報がわかるので、その点については非常に助



図版6 明治5年の正倉

かっています。



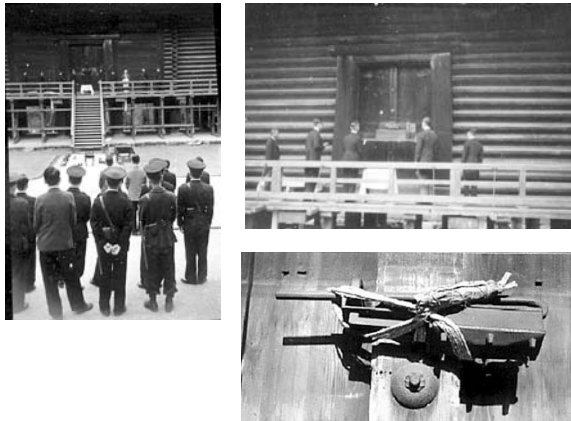
図版7 明治5年の宝物写真撮影

正倉院の管理 図版8には、正倉院が近世以降どのように管理されてきたか、制度的な変遷をまとめました。現在正倉院・正倉院宝物は宮内庁正倉院事務所が管理しています。ここで、平成6年（1994）に正倉が国宝指定になったことについて一言説明します。「国宝」「重要文化財」は、その管理について文化庁の権限の及ぶ建物・文物についてのランクですが、正倉院宝物や正倉は、文化庁とは別組織である宮内庁がしっかりと管理しているため、その対象外にありました。ただし東大寺の周辺地域が、正倉院も含め世界遺産指定を受けるときに、建物が国宝であることがその要件であったため、正倉院の建物のみ、宮内庁管轄のまま国宝指定を受けることになりました。ところで、宝物は現在国宝ではありませんが、文化庁の基準をあてればおそらく、全点国宝となりましょう。

明治8年(1875) 正倉院、内務省の所管となる(勅封は宮内省の所管)
 明治14年(1881) 図書は内務省、御物は農商務省、勅封は宮内省の所管
 明治17年(1884) 正倉院の宝庫および宝物を宮内省の専管とする
 明治18年(1885) 正倉院の宝庫および宝物を宮内省図書寮の主管とする(皇室の御物)
 正倉院宝庫掛をおく
 明治22年(1889) 正倉院を帝国奈良博物館の一部とする 明治19年・博物館宮内省の所管となる
 明治23年(1890) 正倉院宝物を帝室宝器主管の管理とする
 明治25～37年(1892～1904) 宮内省に御物整理掛をおく
 明治41年(1908) 東京帝室博物館に正倉院宝庫掛をおく
 大正3年(1914) 奈良帝室博物館に正倉院掛をおく
 昭和22年(1947) 正倉院の宝庫および宝物を宮内府図書寮(23→宮内庁書陵部)の主管とする(皇室用公用財産) 昭和22年・博物館文部省の所管となる
 昭和31年(1956) 正倉院事務所、宮内庁の付属機関となる
 昭和59年(1984) 正倉院事務所、宮内庁の施設等機関となる
 平成9年(1997) 正倉院宝庫、宮内庁管轄のまま国宝となる(東大寺周辺世界遺産関係)

図版8 正倉院の管理（明治以降）

正倉での御開封風景 図版9は昭和25年（1950）の、正倉での御開封風景です。このとき、宝物はもちろん正倉の中に収蔵されていました。海老鏡の左上には、天皇陛下のご署名（花押）がくくりつけられ、竹の皮で保護されています。（図版9右下）。



図版9 校倉での御開封風景（昭和25年）

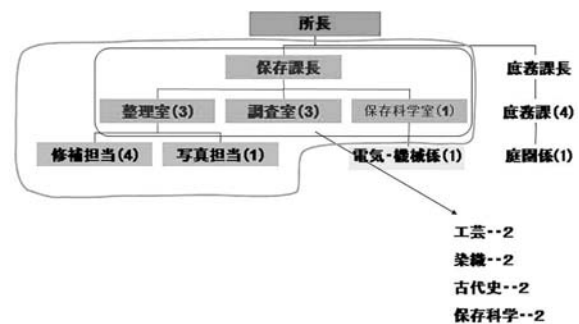
正倉での曝涼風景 図版10には、昭和25年（1950）の正倉での曝涼の作業風景を示しました。図版10上左は、容器のガラス蓋を外しているところ。図版10上右は、防虫剤の樟脳を入れているところ。図版10中左は、宝物容器のガラスをふいているところです。この当時は、東京からも応援を仰ぎ、10名程度で曝涼作業を行っていました。図版10下左は、容器の蓋をあけて、風を招き入れているところで、竹製の籠です。図版10下中は、馬具を取り出し点検しているところです。現在、文化財の微生物対策として収蔵庫の中での掃除の重要性がうたわれていますが、正倉院では、この当時からそれを実践していました（図版10下右）。



図版10 正倉での曝涼風景（昭和25年）

曝涼から点検へ 宝物が正倉にあるときは、扉を開けると、風が通り、それは曝涼と言うにふさわしい行為でした。昭和35年から宝物を新宝庫に移動し、さすがに宝物を外気に直接当てることはなくなり、ここで行われる作業は点検と呼ぶべきものとなりました。

ここで現在の正倉院事務所の組織について触れることにします（図版11）。全員で21名の小さな事業所で、保存課職員13名が宝物を扱います。保存課には研究職が8名いて、その専門のうちわけは、工芸2名、染織2名、古代史2名、保存科学2名です。そのほか修理の専門職員が4名、写真の専門職員が1名います。このように保存課には様々な分野の人間が集まっていますが、正倉院宝物の保存が最も重要な仕事と心得ています。10月、11月の開封期間には、保存課職員全員が保存担当者になった気持ちで、作業に従事しているのです。



図版11 正倉院事務所の組織（21名）

正倉院宝物の点検 正倉院には宝物が約9,000点、このほかそれと系統の異なる聖語蔵経巻が約5,000点あります。これらを、延べ約300人日、すなわち保存課職員は13人ですから、全員で約25日かけて点検することになります。西宝庫は勅封倉であり、建て延べ面積が1,188㎡です。これを10月～11月のうちの約20日をかけて点検します。これに対し東宝庫（931㎡）は5月初旬の約5日をあて点検します。点検は複数の職員で一班を構成して実施しますが、担当する宝物はランダムであり、職員の専門はあまり考慮されません。

作業内容は、微生物や物理的破損の有無、劣化進行状況の確認などを目的とした点検であり、問題のあるものには個別処置を実施し、木工品・染織品などについては、予防的に防虫剤（樟脳）を側に置きます。すべての点検を終えて、御閉封日の前には庫内清掃をすることになります。

図版12は、これら点検作業が行われる西宝庫（左）と東宝庫（右）です。



図版12 西宝庫（左）・東宝庫（右）

図版13は、東宝庫での点検作業の様子です。点検にかかる前に、空調の吹出口にカバーを掛けるなど、その準備をします。（図版13左上）。図版13右上は大型の幡を3人で点検しているところ。図版13下は古裂が貼られた屏風の表面の埃を筆で払っているところです。



図版13 現在の東宝庫の点検作業（5月）

現在の西宝庫での御開封の儀式 図版14左上は所長に先導され勅使が西宝庫に向かう様子です。扉の前で封を解いているのは私です（図版14右下）。正倉に宝物があった時代と同様、竹の皮にくるまれた天皇陛下のご署名（花押）の無事を勅使の前で確認し、その後鍵を開け、扉を開いて庫内に入り、ひとまわりして宝物の安全を確認するわけです。



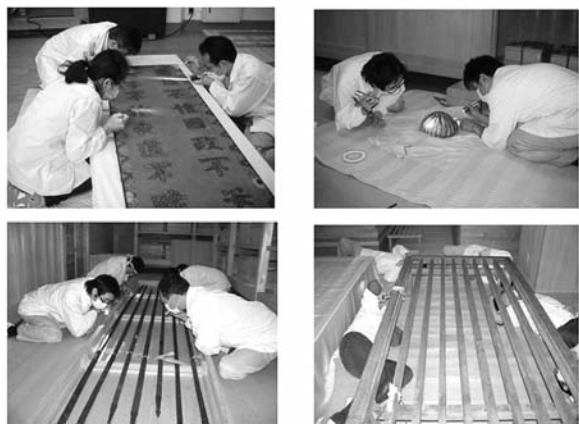
図版14 西宝庫の御開封風景（10月）



図版15 現在の西宝庫の点検風景（平成19年10～11月）

西宝庫での点検 図版15左上は正倉院宝物でも有名な瑠璃坏の点検の様子です。ガラスであるため取り扱いには細心の注意が必要です。サイズからして実際は一人が取り扱うこととなりますが、ほかの二人もこれを見守り、もしなにか危険が生じそうな場合、すぐに手助けできる体勢にあります。図版15右上は正倉院に500点近くある花籠を点検している様子、また図版15左下は大人数で毛氈にヒメマルカツオブシムシなどの害虫がないか点検しているところです。図版15右下は刀の刀身を、塗られた油を除去しながら点検しているところです。

図版16左上は、黴の生えやすい屏風を詳細に点検している様子、図版16右上は正倉院三彩を点検している様子、図版16左下は長い柄を有する鉾の点検の様子、図版16右下は、聖武天皇と光明皇后のダブルベットをその下に潜って点検しているところです。繰り返になりますが、点検の具体的内容は黴虫害の有無や異状の確認などですが、それだけをやっているのではなく、同時にわずかな時間を利用して、点検対象の宝物について勉強し、鑑賞しているのです。宝物をより良い状態で保つてゆくためには、宝物の全てを知りつくしておく必要があります。正倉院の保存課職員は10年くら



図版16 現在の西宝庫での開封作業（平成19年10～11月）

いでひととおり宝物を点検することになりますが、点検を行うことで、個々の宝物についての一般的な知識が備わり、例えば保存科学を専門とする私でも、正倉院関係の本の出版に際しては、たいていの宝物の解説を書くことくらいはできるようになります。

正倉院宝庫内の清掃 宝物の点検をすべて終えた御閉封の前日は、保存課総出で庫内の清掃を行います。棚や戸棚などをアルコールで拭き、床は掃除機を丹念にかけます（図版17）。



図版17 正倉院宝庫内の清掃（平成19年11月）

正倉院宝庫開封中の諸行事 ここでは開封期間中に行われる、点検以外の諸作業についてご紹介します。図版18左上は正倉院展出陳宝物の引き渡しの様子です。正倉院展に出陳する宝物の数は約60～70点で、そのため宝物の点検と引き渡しは1週間ほどをかけ、入念に行われます。正倉院展の期間は通常17日で、長い時は20日くらいとなります。会期をもっと伸ばして欲しいという要望もありますが、開封の2ヶ月間で、展覧会期間以外に貸出や引き取りの際の点検や、展示作業などのスケジュールを全てこなすには、これがぎりぎりです。展示期間を長くするためには、開封期間をもっと伸ばす必要があり、宝物の保存を優先すると無理なのです。

図版18右上は専門の先生にお越しいただき、材質調査を行っているところです。平成21年（2009）は毛の調査が行われ、北大の先生方2名も調査員として加わっていただきました。先に正倉院宝物が150種類ほどの材質からできていることをお話しましたが、このような材質調査の研究成果を利用させてもらっているのです。

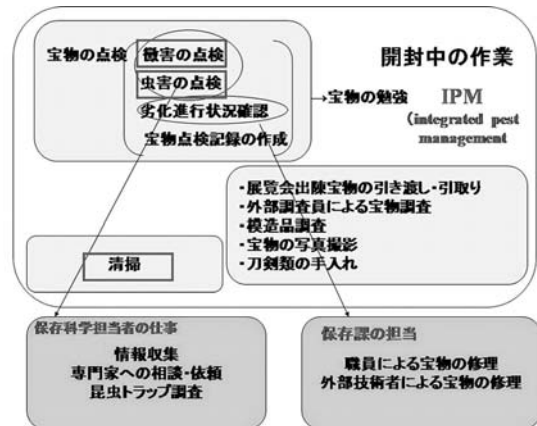
図版18左下は宝物模造品作製のために、構造や材質の調査などを行っているところです。ここで扱われている宝物は懐裕です。



図版18 開封中 宝庫での諸作業

図版18右下は宝物の写真撮影の様子です。宝物の写真撮影は、従来は宝物が美しく見える方向を中心に行われてきましたが、近年は、そうでない方向や、痛んでいる部分などについて、行われることも多くなってきました。痛んでいる部分では、宝物の製作技法や内部の構造や見えることも少なくありません。

開封期間中の諸作業について、これまでのお話と重複するところもありますが、全体の概念図を、図版19に示しました。宝物の点検では黴虫害の有無や、物理的な破損、劣化状況などを調べます。また開封の最終段階では庫内の掃除を徹底的に行います。従来、文化財分野では黴虫害に対しては、臭化メチルと酸化エチレン混合製剤（商品名；エキボン）によるガス燻蒸が大変有効で、広く用いられて来ましたが、しかし、臭化メチルは、オゾン層を破壊する物質ということで使用禁止になり、また酸化エチレンもその発ガン性が問題となり、この方法は廃れました。現在は、IPM（Integrated Pest Management：総合的害虫防除）という方法が流行となっています。この方法はこれら害を完璧になくすのではなく、対象物の点検や収蔵庫の清掃をこまめにすることによって、これらの害をなるべく少なくしようと言う考えです。これは何のことはない、一昔前の日本で行われてきた「曝涼」作業の一部です。



図版19 開封期間中の諸作業概念図

またIPMの考えの場合、対象物の鑑賞はこれに含まれていませんが、正倉院ではこのような項目も含んだ点検を行っており、持続性という点からも優れていると自負しています。

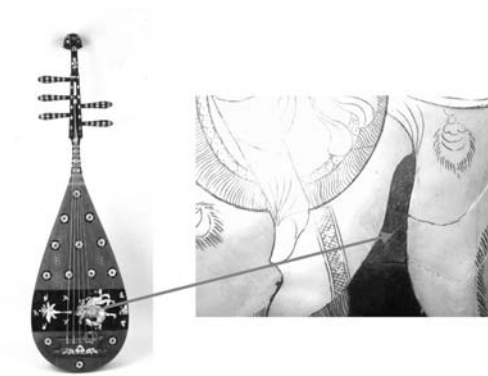
3. 正倉院宝物の修理・整理

宝物修理の歴史 図版20には明治以降の宝物修理の歴史を示しました。



図版20 宝物修理の歴史 (明治以降)

江戸時代以前にも宝物の修理はありました。それは宝物製作直後からあったと考えて良いと思います。図版21は螺鈿紫檀五絃琵琶ですが、玳瑁貼りの捍撥に表された駱駝の足の付け根の部分の玳瑁がはずれ、そこに樹脂状の物質を充填しています。



螺鈿紫檀五絃琵琶

図版21 螺鈿紫檀五絃琵琶の修理箇所

江戸時代の修理など 徳川家康は正倉院正倉の修理や宝物の保存のため尽力をしました。慶長8年(1603)、すなわち関ヶ原の戦いの3年後に、すでに家康には天下人になったという自負があったので、正倉の修理を指示し、また宝物の保存のために約30合ほどの櫃を寄進しています (図版22)。

元禄6年(1693)または天保4~7年(1833~36)には鳥毛の貼られた屏風が修理されています。一畳六



図版22 慶長櫃

扇の屏風はそれぞれが切り離され、画面の周囲には天保時代の裂が切り取られ使われています (図版23)。



鳥毛帖成文書屏風

鳥毛篆書屏風

図版23 元禄6年または天保4~7年の修理

鳥毛立女屏風 (図版24左) は最近では昭和63年(1988)に修理が行われました。その際のレントゲン撮影など (図版24右) を利用した事前調査によって、元禄期、天保期なども含め、昭和以前にも数度にわたり修理が行われていることがわかりました。



鳥毛立女屏風

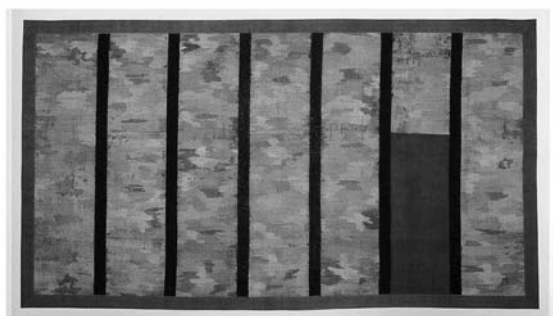
レントゲン写真

図版24 鳥毛立女屏風とその修理箇所

天保4~7年開封度には正倉院裂の保存のため、手向山神社上司延寅は正倉院古裂の中から美しい裂を選び、屏風に貼って手鑑としました。正倉院裂の中でも

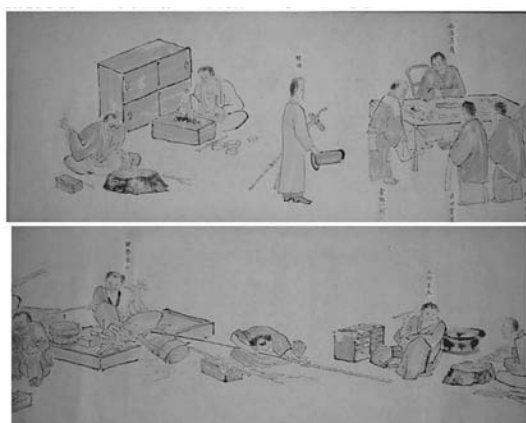
稀少な裂を、屏風仕立てとしています。ただしこれら古裂は、今は屏風からはずし、保存されています。

明治時代の古裂の分類 明治9年(1876)内務省の大久保利通は殖産興業と正倉院古裂の保存を目的とし、古裂を手鑑とし、各地の博物館等に分頒しました。ただしこのときは、その時点で破片となっていた古裂だけではなく、例えば聖武天皇の御使用した袈裟の一部などを部分的に切り取っており(図版25)、現在とは文化財保存に関する観点が異なることを割り引いても、行き過ぎは否めないものもあります。



図版25 七條織成樹皮色袈裟

正倉院御物整理掛の修理 正倉院御物整理掛は明治25～37年(1892～1904)に活躍しました。各分野で、江戸時代生まれの優秀な工人達を集めています。当時は写真が貴重であったため、彼らの作業の様子を伝える写真は残されていませんが、かわりにその様子を描いた漫画風の絵が残っています(図版26)。

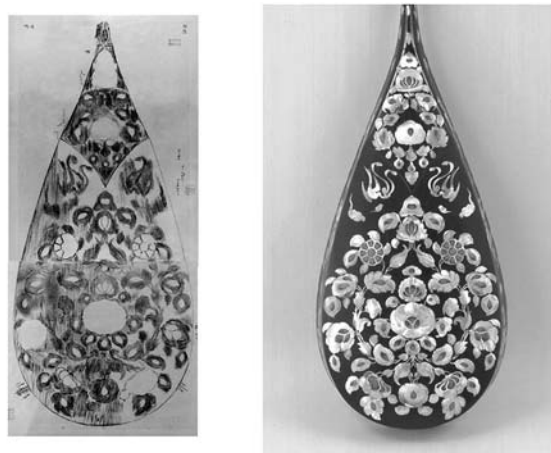


図版26 正倉院御物整理掛の修理(明治25～37年)

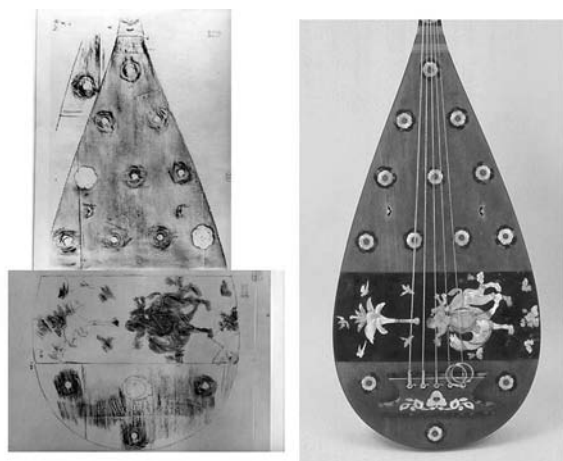
螺鈿紫檀五絃琵琶(図版27)は御物整理掛によって大きな修理を受けたもののひとつです。図版28左・図版29左は壬申検査で蝮川式胤がとったそれぞれ背面、捍撥面の拓本です。また図版28右、図版29右は、それぞれに対応する面の現在の写真です。両者を比較することにより、明治初年に相当螺鈿や玳瑁などが落ちて



図版27 螺鈿紫檀五絃琵琶



図版28 螺鈿紫檀五絃琵琶の裏面

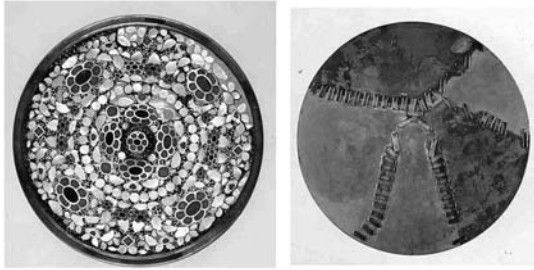


図版29 螺鈿紫檀五絃琵琶の表面

いる様子や、修理をした箇所などがわかります。

北倉の鏡のうち9面は鎌倉時代に盗難にあって、破損しました。鏡によって破損の程度は様々でしたが、うち8面は御物整理掛による修理を受けています。図版30に示した螺鈿背鏡もその一面で、鏡背の網を掛けた部分のみがオリジナルの部分で、他は復元によるも

のです。ただしこの復元は、鏡背に残る様々な痕跡に基づき、根拠あるものであったと考えられています。また鏡体は5片に分かれていたため、銀の銚で接合し、修理しています（図版30右）。



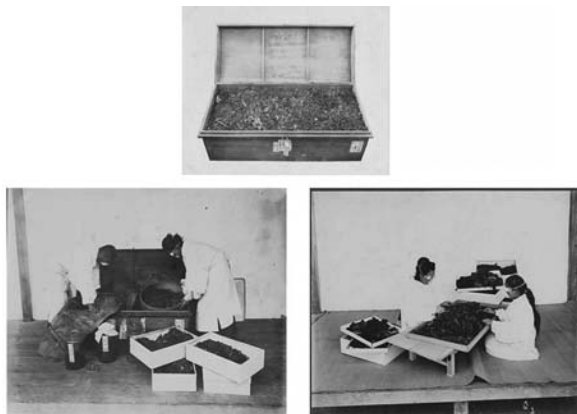
図版30 平螺鈿背鏡第9号の修理箇所

御物整理掛は正倉院宝物でも有名な工芸品の修理をほとんど手がけており、この修理がなければ、多くの宝物は安心した状態で動かせず、したがって正倉院展はなかったかも知れません。

4. 染織品の修理と保存



図版31 正倉院掛による染織品の修理（大正3年）



図版32 正倉院掛による塵芥の選り分け（大正3年）

正倉院掛～正倉院事務所保存課による染織品、経巻の修理 大正3年（1914）からは、宮内省に正倉院掛が置かれ、自前で染織品と経巻の修理を行うようになります。図版31は、そのときの修理の様子、また図版32は、染織品の選り分けの様子です。時は移って、現在は正倉院事務所保存課の修理担当の4名の技官が正倉院掛の仕事を引き継いでいます。正倉院事務所では平成19（2007）年度に新しい庁舎が完成し、現在修理は其中で行われています。図版33は部屋での作業の様子です。



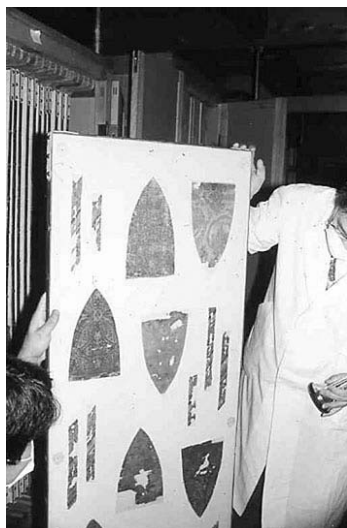
図版33 現在の修理室

染織品の保存方法と現在の修理 染織品には様々な保存（収納）方法があります。多くの染織品の材質は絹です。これを折りたたむとその部分から筋切れなどが起こり、破損につながります。そこで現在、ほとんどの染織品は広げて保存することを基本方針としています。イオン交換水を用い、糸目をそろえ、部分的には紙を当てて補うこともあります。たいていは、この錦道場幡（図版34左）のように平面に仕上げますが、中には、天蓋（図版34右）のように、もとの形を勘案してある程度立体的に仕上げるものもあります。



図版34 染織品の一般的な完成姿

屏風装古裂 正倉院古裂を屏風装仕立にすること（図版35）は、先に紹介したように江戸時代以来行われていました。大正時代になって本格的に古裂整理がはじまると、古屏風の骨や帖など有効利用するために、この方法が採られました。最近の一部のものを除いては行っていません。



図版35 屏風装古裂

軸装古裂 古裂を巻物仕立とする（図版36）方法は、かつて狭い正倉内で染織品をコンパクトに収納する方法として採用されていましたが、巻物をまるめたり、広げたりするたびに古裂が傷むので、現在は採用していません。



図版36 軸装古裂

玻璃装古裂 染織品をガラス板で錶んで収納する方法（図版37左）のメリットは、裂の表裏を観察できることです。最近まで、この方法は続いていました。しかし、ガラスは調湿能が無いので、挟まれた部分の相対湿度が高くなりやすいという問題が生じていました。そこで現在は、中性紙二枚を用いて製作した台紙の落とし込みに裂を配置し、台紙の周囲を以前からある木

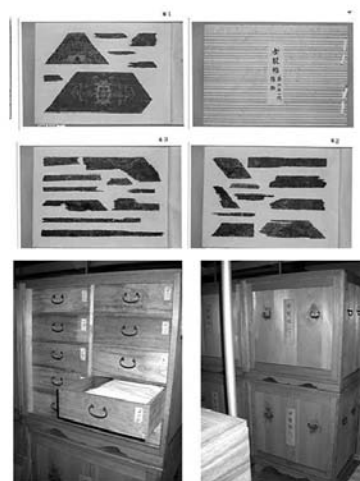
枠で固定する方法に改装しています（図版37右）。



図版37 玻璃装古裂

古裂帖 小さな断片の古裂は、同じような種類、同じような色のものごとに、まとめて、最終的にノート仕立てとして、これをタンスに収納しています。この古裂帖は現在約900冊ほどになります（図版38）。

なお、ごく一部の染織品については、現在の技術では修理が困難なため、そっと横たえているだけのものもあります



図版38 古裂帳およびその収納状況

大型染織品の修理の様子 図版39は、平成8～9年（1996～1997）に大型染織品の最後の修理が行われた時の様子です。修理品は天蓋であり、もっともベテランの修理専門の職員が根気よく一年かけて、その表裏を修理しました。



図版39 天蓋の修理（平成8～9年）

塵芥古裂の整理 図版40は、塵芥古裂の整理しているところです。小さい古裂は水を用いて伸ばし、また古裂の間から出てきた器物等の破片については、同類を集め、収納しています。修理専門の職員も、点検時などには日頃様々な宝物に接しているのです、小さな部品についても、それが何の一部なのかたちどころにわかる場合が多いのです。



図版40 塵芥古裂の整理（現在）

経巻の修理 聖語蔵経巻の修理は、大正3年（1914）から行っています。作業は虫食いの部分をひとつひとつ和紙で補うものです。修理が終了すると、そのときの責任者が署名します。経巻の巻末に見える森林太郎とは文豪森鷗外（1862—1922）のことで、鷗外は晩年に帝室博物館の総長をつとめています（図41）。



図版41 経巻の修理

5. 器物の修理

器物は大正時代以降、外注の修理が行われてきました。大正10年、昭和4年（1929）には正倉院の近くに住む漆芸家吉田三兄弟（吉田立斎・北村久斎・吉田包春）により、それぞれ密陀絵盆の修理、漆彩絵花形皿の修理が行われました（図版42）。戦後は牧田三郎氏により昭和34～50年に皮革製品の修理が（図版43）、

北村大通により昭和38～48年に漆工品修理が行われています（図版44）。最近では平成5年（1993）から現在まで、伎楽面の修理が行われており、漆の剥落や木地の亀裂については漆芸家で人間国宝の北村昭斎氏に、また顔料等の剥落止めは京都の岡墨光堂に依頼しています（図版45・46）。



図版42 大正～昭和初期の外注修理



図版43 牧田三郎による皮革製品修理（昭和34～50年）



図版44 北村大通による漆工品修理（昭和38～48年）

御物整理掛の修理は、失われた部分についても、復元できるところは、積極的に補う「復元修理」でしたが、吉田三兄弟以降の修理は、それ以上の宝物の損壊を防ぐための最小限の修理で、「維持修理」とも言



図版45 伎楽面の修理風景



伎楽面木彫第56号

図版46 伎楽面の修理（平成5年～）

うべきものです。このような方針は、現在正倉院宝物のみならず、わが国における文化財修理の理念における潮流となっています。

6. 宝物の模造

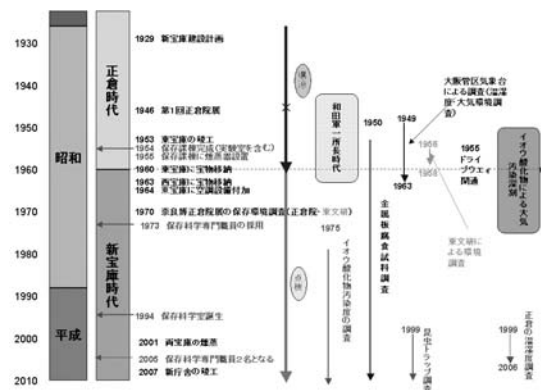
正倉院宝物の公開は今のところ国立博物館のみに限られています。それ以外の場所や機会に正倉院宝物に匹敵するものを広く鑑賞して頂くことなどを目的として、正倉院の模造事業は、昭和47年（1972）にはじまり、現在までに43件の模造品が完成しました。図版47には完成した模造品の原宝物の一部を示しています。模造は、形をまねるだけではなく、製作技法や使用素材も、できる限り原宝物と同じにすることを目的としています。しかし優秀な製作者が高齢化する一方、若い世代が育たないことによる人材難と、象牙や玳瑁など、当時良く用いられた動物素材が、ワシントン条約のからみもあって調達しにくいことなどが難点になって、模造の実施は年々難しくなっています。加えて現在の国家の方針で、修理・模造などについても、可能な限り競争入札をすべきではないかという考えが出始め、それが実現すれば、私たちの望む技術レベルの維持は事実上できなくなる可能性があります。



図版47 模造品の原宝物（一部）

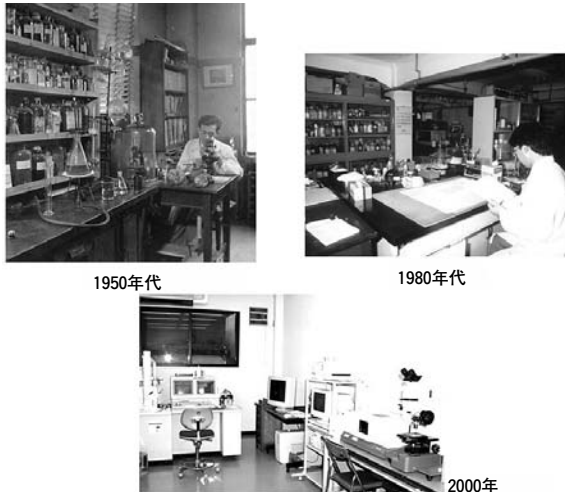
7. 正倉院事務所における保存科学

正倉院事務所における保存科学関係の年譜を図版48に示しました。正倉院事務所における保存科学的な取り組みは、昭和30年頃から始まりました。この頃、正倉院の敷地の北東に観光ドライブウェイが開通し、周辺の大気環境が急激に悪化し、宝物に様々な影響が及ぶようになったのです。正倉院事務所の初代所長であった和田軍一氏は、大阪管区気象台などに正倉内外あるいは新宝庫内外の保存環境調査を委嘱し、この問題の解決にあたりました。また専門の職員はいなかったものの、実験室なども一応備えられ（図版49左上）、また調査の一部を一般の職員が手伝っていました。



図版48 正倉院の保存科学関係年譜

正倉院における保存科学を専門とする職員の採用は、昭和48年が最初でした。私が奉職することになったのはちょうどその10年後の昭和58年で（図版49右上）、初代職員が他の職場に転出したのに伴うものでした。平成10年（1998）頃までには、調査に用いる分析機器類がかなり充実し（図版49下）、また平成17年には保存科学専門職員が増員され、計2名となりました。



1950年代
1980年代
2000年
図版49 保存科学室（実験室）の変遷

宝庫の保存環境とその調査 図版50左上は正倉院の各施設と奈良の奥山ドライブウエーを示す航空写真です。当時は正倉に宝物が保存されており、その多くは、展示ケースを兼ねたガラス戸棚内にありました（図版50右上）。ドライブウエーの開通により、戸棚内に置いてあった銀壺（図版50下）の表面がイオウ酸化物の影響により、それとわかるくらい黒化したといわれています。



奈良 奥山ドライブウエー(昭和30年に開通) 昭和31年の庫内（南倉）の様子



図版50

西宝庫・東宝庫は、イオウ酸化物、窒素酸化物などを除去するための空気浄化設備を備えています（図版51）。文化財収蔵庫にこれらの設備を付加することは現在では常識ですが、昭和30年代では、非常に先進的であったと言えます。

現在私たちは、空気浄化設備の効力を確かめるために、宝庫内外においてトリエタノールアミン円筒濾紙法による二酸化窒素・二酸化イオウの測定（図版52）と、金属板（銀板・銅板・鉄板）の反射率測定（図版53）を行っています。両者は別の原理に基づいた方法

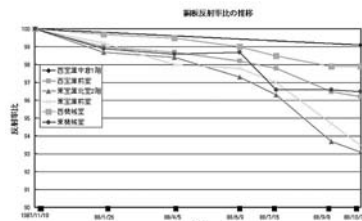
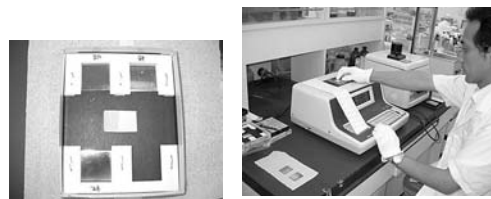


図版51 西宝庫裏側（空調室側）



図版52 トリエタノールアミン法による調査

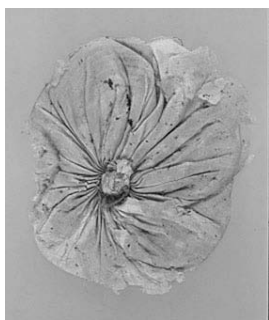
で、前者はその測定値が小さいほど、また後者は一年を通しての反射率比の低下の度合いが小さいほど、望ましい空気環境であると、すなわち空気浄化設備がしっかりと機能していると判断できるわけです。これらの指標が例年に比べ、大幅に悪化すると問題ですが、今のところずっと例年並みであることを確認しています。



図版53 金属板腐食試験調査

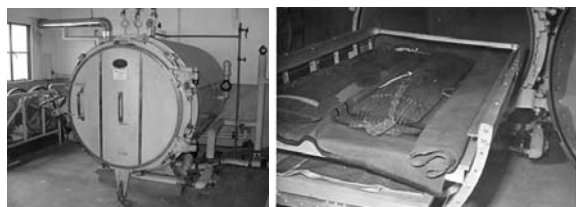
文化財害虫対策 わが国でよく知られる文化財害虫には、ヒメマルカツオブシムシ（幼虫）、イガ（幼虫）、

シミ、シバムシ、ゴキブリなどがあります。正倉院の文化財害虫対策については、歴史的にはエヒ香と称する忌避剤を用いてきました。これは白檀・丁子・沈香・甘松香からなる合香であり、正倉院宝物の中にも当時のものが伝わっています（図版54）。20年ほど前まで新しいものを作っていました。どうやら虫が忌避する効果はほとんどないことがわかり、現在その目的のためには使用していません。現在私たちが使用している忌避剤は樟脳です。



図版54 エヒ香

殺虫燻蒸 正倉院事務所では昭和30年（1955）に文化財用第1号となる燻蒸装置を導入（図版55左）しました。この装置によって、昭和30～35年までの間、花氈、馬鞍、弓、琴など約200点の宝物の燻蒸を行いました（図版55右）。この臭化メチルは、現在オゾン層を破壊する悪玉化合物として摘発され、文化財分野でも、使用禁止になっています。



図版55 正倉院の燻蒸装置と宝物の燻蒸

昭和30年代に宝物の燻蒸が実施できたおかげで、現在宝物に虫害による被害はほとんど認められません。前にも述べましたが、現在私たちは、虫害対策としては、目視による点検を主体に行っています。

正倉院以外でも、IPMと呼ばれる、目視等による点検を主体とする方法が流行ってきましたが、これと併行して、臭化メチル-酸化エチレンに代わる薬剤の開発や、新しい殺虫法の開発も行われています。

その様な方法のひとつに害虫を窒息させることを目的とする低酸素法と呼ばれる方法があります。正倉院事務所でも、そのために開発された窒素発生装置を導入し、殺虫効果などをいろいろ試しているところ（図版56）。

被害対策 被害については、それが宝物に認められた場合、アルコールによる拭き取りによる除去を基本としています。また予防的には商品名BCAゲルと呼ばれる薬剤（シリカゲル乾燥剤+ α -ブロムシンナムアルデヒド）を用いています。現在はこの薬剤による効果を高めるため、予防の対象となる宝物をこの薬剤とともに、ガスバリアフィルムに封じ込める試みも行っています。



自動窒素発生装置

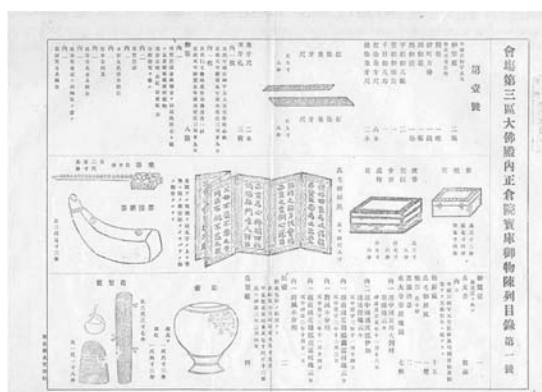


処理中の花氈

図版56 脱酸素システムによる殺虫の試み

8. 正倉院宝物の公開

正倉院宝物の一般公開は明治時代の初期に数回行われています。図版57は明治8年（1875）に行われた奈良博覧会の出陳品の目録です。



図版57 明治8年奈良博覧会出陳品目録

また明治時代からは開封期間中に正倉内部での宝物の公開も行われるようになりました。この方法は正倉院展がはじまった後も昭和34年まで続きます。残念ながらその拝観が許されたのは一定資格を満たした貴紳のみでした。図版58は、現在の正倉内部の様子です。ここに見えるガラス扉の展示ケースは、その板ガラスを明治12年に伊藤博文がドイツから取り寄せ、取り付けさせたものと言われています。



図版58 宝庫内部の様子（現在）

正倉院展 昭和21年（1946）から奈良国立博物館において正倉院展がはじまりました（図版59）。これ自体は一般の国民が唯一宝物を直接鑑賞することのできる場として、とても大切です。近年、後援の新聞社が交替し、広告などを通し、入場者の大幅アップに力が注がれるようになりました。直近の正倉院展では入場者の1日平均は1万7千人くらいです。これだけ混雑する展覧会はわが国では希と言って良く、またこのことによる問題が生じています。すなわち展示ケースの周囲における観客の密集がケース内の温湿度の安定に影響を与えることがあるのです。このことについては現在様々な方法で解決が図られていますが、展覧会に興味のない人々まで、宣伝により引き込むことについてはデメリットもあるのです。



図版59 正倉院展（平成18年）

9. 正倉院周囲の火災と現在の消防体勢

正倉院正倉は幾度か火災の危機がありました。木造建築ですので、火事になれば、建物と収蔵物はそれで終わりです。現在まで、火災により灰燼に帰さずにすんだのは、ある意味で奇跡に近いことです。記録に残る火災の危機としては、延喜17年（917）の講堂や僧坊の羅災、治承4年（1180）の平重衡の南都焼き討ち、

建長6年（1254）の北倉への落雷（図版60）、永禄10年（1567）の三好三人衆と松永久秀の戦いなどがあります。このうち2件の戦災では大仏殿を含め東大寺構内の主要な建物は軒並み羅災していますが、いずれも正倉院正倉は難を逃れることができました。また建長6年の落雷は、夜の8時頃の出来事で、扉付近から発火しましたが、何とか初期消火に成功したようです。現在も北倉の扉脇にはそのときの焦げ跡が残っています。（図版60）。



図版60 建長6年の落雷の痕跡（正倉北倉）

現在は宝物は西東両宝庫に収蔵していますので、これについては火災の心配はほぼなくなりました。しかし、正倉については建長6年の落雷が示すように、火災の危機が去ったわけではありません。正倉の周囲には放水銃ならびに放水ポンプの取水口もあり、何かあれば正倉院の職員と、正倉の周囲を巡回する皇宮警察官が出動し、また近所の人々によって組織されている特設消防隊も駆けつけることになっています。

おわりに

以上「正倉院宝物の曝涼」というタイトルで、正倉院における、正倉や宝物保存に関する取り組みの一端をご紹介しました。「正倉院の仕事」と言えば、皆様はおそらく正倉院展のことを思い浮かべ、ほかは何をしているのか知らなかったのではないかと思います。この話が、正倉院の仕事に対する理解を深め、またより一層、正倉院、正倉院宝物に興味を持っていただくきっかけになれば幸いです。

北海道立埋蔵文化財センター年報11

平成21（2009）年度

平成22年 5月20日発行

編集：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

発行：北海道立埋蔵文化財センター

〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1

Tel：(011)386-3231 Fax：(011)386-3238

E-mail：mail@domaibun.or.jp

URL <http://www.domaibun.or.jp/>

印刷：社会福祉法人 北海道リハビリ

〒061-1195 北広島市西の里507番地1

Tel：(011)375-2116(代) Fax：(011)375-2115
